濟生

SAISEI

THE NEWSLETTER of
Social Welfare Organization
Saiseikai Imperial Gift Foundation, Inc.

No.1134

特別インタビュー＆取材
みやぎ乳児院・こどもクリニック
富谷市へ移転新築

12
December 2023

https://www.saiseikai.or.jp
社会福祉法人 恩賜財団 済生会

済生会の不易流行論

183

理事長 **炭谷 茂**
Shigeru Sumitani

外国人が暮らす インクルーシブ社会

夏目漱石が1900年、英国に留学し、ノイローゼ気味になったことは知られている。日本からの訪英者が少なく、イギリス人のほとんどが知らない東洋の果ての国から来た日本人が、見下されていたことも一因にあるのだろう。

彼が留学中に下宿した家の一つは、ロンドン北部のプライオリ・ロードにあった。私は、最初にロンドンに滞在した時、この道路に面したフラット（日本で言えばマンション）を借りた。イギリスの外務省職員の所有物件で、アフリカのアンゴラに赴任するので、貸し出されていたフラットであった。漱石の下宿していた家とは、近接していた。

私が住んでいたころの町は、ロンドンでは中くらいにランクされる地域だった。地下鉄の駅やスーパーマーケットが近くにあって、生活するのに便利だった。狭い間取りだったが、妻と1歳の長男との3人暮らしには十分だった。イギリスでの生活は、楽しい思い出しか残っていない。

漱石の時代は、ハムステッドの森が近くにあって閑静な環境で、生活にゆとりのあるイギリス人が住んでいた。治安も良いので、東洋の果てからの来訪者であっても、機会を求めていけば、イギリス人は歓迎してくれたはずだ。孤立したのは漱石の性格にあったのだろう。

今ではどこの国にもたくさんの外国人が住んでいる。どの国も外国人なしには経済や社会が回らなくなっている。多様な文化の国の人が加わることで相乗効果が発揮され、国は発展する。

この点ではベルリンが、最も成功している都市のひとつである。ウィキペディアによるとベルリン・ブランデンブルク大都市圏の人口は、590万人で190カ国以上の海外出身者が暮らしている。日本人も多い。これがベルリンの経済、科学、文化を世界最高水準に押し上げている。治安はよく、真夜中歩いても不安を感じない。ベルリンに暮らす人は、文化の多様性の素晴らしさを享受している。

☆　☆

日本の在留外国人は、300万人となった。日本もグローバル化の例外でなく、今後も増加していく。

農業、建築業、流通業など多くの分野で人手不足に直面し、経済活動に支障が生じている。人手不足による倒産も発生している。人手不足を外国人で手当てする動きが加速している。介護や看護でも同様である。

外国人労働では技能実習生制度を中心に深刻な人権問題が発生しているので、政府では同制度の改正が検討されている。

済生会の病院や福祉施設では、制度の改正状況を見定めながら、外国人労働者の人権の尊重を前提にして、外国人の雇用のあり方を検討していきたい。

この場合、外国人も地域住民の一人として暮らすインクルーシブ社会の形成という観点が、もっとも重要である。

不易流行（ふえきりゅうこう）：不易は永遠性、流行はその時々の新風をいい、芭蕉が俳諧思想を表現するときに用いた。
済生会は長い歴史で醸成された価値を大切にして、時代の変化に適応していかなければならない。

SMBC　SMBCグループ

昨日、
今日、
明日、三井住友銀行と。

昨日とは違う今日をはじめるために。
今日を未来へとつなげていくために。
私たちは、お一人おひとりの毎日を、
一つひとつの変化を、丁寧に見つめていきたい。
いつどんなときも、あなたにいちばん近い銀行でありたい。
これからもずっと、あなたの人生のパートナーであるために。

三井住友銀行

濟生

SAISEI

DECEMBER, 2023

CONTENTS

みやぎ乳児院・こどもクリニック富谷市へ移転新築

特別インタビュー 市と済生会がタッグで「住みたくなるまち日本一」を目指す
〈宮城〉富谷市長 **若生裕俊さん** 06

特別取材 新たな地に根差して子どもの健康と成長を支える

済生会交差点 《高齢患者への認知症ケア》院内デイケアにより、患者の機能維持と環境改善につなげる／《利用者との関係づくり》伝えたい！ ケアマネの役割。リーフレットでわかりやすく紹介 14

巻頭コラム 済生会の不易流行論
外国人が暮らすインクルーシブ社会 理事長 炭谷 茂 03

済生会フェア
〈静岡〉伊豆医療福祉センターまつり 13
〈福岡〉飯塚嘉穂病院 18
〈福岡〉二日市病院 24

ソーシャルインクルージョン 20

報告 生活困窮者問題シンポジウム 26

TOPICS 34

載々、大雑報 86

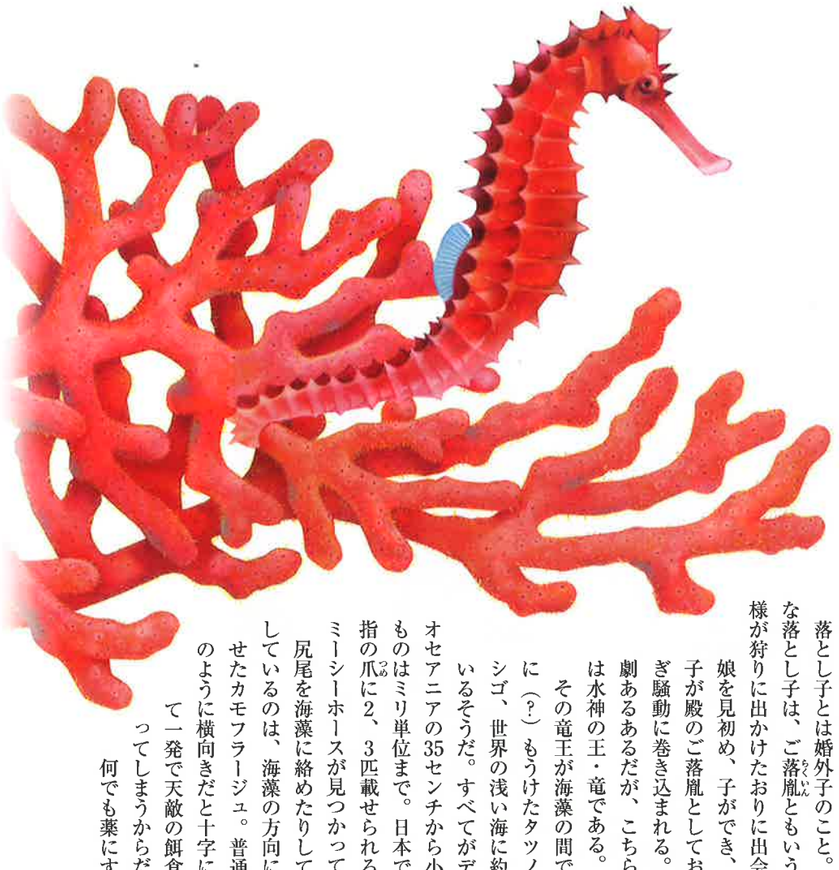
12月のたよりが聞こえる タツノオトシゴ
表紙のことば 久保田眞由美 05

この人 西尾まり 28

口福にっぽん 吉井省一 30

だれでもかんたん てづくりおもちゃ いまいみさ 32

題字協力：石飛博光
アートディレクション：OVO INTERNATIONAL



12月のたよりが聞こえる タツノオトシゴ

魚なのに直立し、馬みたいな顔。英語名のシーホース（海の馬）はぴったしだが、和名の竜の落とし子は、その見てくれ以上にへんてこりんなネーミング。

落とし子とは婚外子のこと。高貴な落とし子は、ご落胤ともいう。殿様が狩りに出かけたおりに出会った娘を見初め、子ができ、その子が殿のご落胤としてお世継ぎ騒動に巻き込まれる。時代劇あるあるだが、こちらの殿は水神の王・竜である。

その竜王が海藻の間で密かに（？）もうけたタツノオトシゴ、世界の浅い海に約50種いるそうだ。すべてがデカいオセアニアの35センチから小さいものはミリ単位まで。日本でも小指の爪に2、3匹載せられるピグミーシーホースが見つかっている。

尻尾を海藻に絡めたりして直立しているのは、海藻の方向に合わせたカモフラージュ。普通の魚のように横向きだと十字になって一発で天敵の餌食になってしまうからだ。

何でも薬にする中国では昔から生薬の原料だし、水族館ではカワイイと引っ張りだこ。繁殖期になるとオスとメスが向かい合ってハート形につながったりするので、幸せのシンボルにもなっている。

そんな姿かたちより驚かされるのは、オスが出産すること。と言っても、メスがオスのお腹にある育児嚢に卵を産み付け、オスが受精、ふ化させてから体外に放出する。大半の魚類のように卵を産みっぱなし、あるいはふ化した稚魚を口の中で保護する種に比べれば、イクメンぶりは際立っている。

外敵に卵が食べられる確率が低いので、メスが一度に産む卵は5～9個。カップルは一生添い遂げるといい、夫婦和合の縁起物として珍重されている。

と思われてきたが、実は違うメスの卵を抱えているオスや、違うオスに卵を産み付けるメスもいるらしい。そのほうが確かに子孫を残すことへのリスクヘッジは上のような気はする。どこの世界にも例外はあるようで。（Y）

表紙のことば

来年は辰年、飛躍できますように

表紙イラスト **久保田眞由美** *Mayumi Kubota*

12月は華やかな場で人に会う機会が増えるかもしれません。辰の子どもという名前が相応しいタツノオトシゴは実は魚です。いつもは目立たぬよう擬態して身を守ります。辰というには控目な性格です。でもパートナーを見つける時は別。鮮やかな色になり挨拶をし、くるくる回るダンスをするそうです。12月を楽しんで！ 辰年に向け成長したタツが飛び立つように発展していくことを願って。

SAISEI 特別インタビュー December 2023

市と済生会がタッグで「住みたくなるまち日本一」を目指す

〈宮城〉富谷市長

若生裕俊さん

みやぎ乳児院・こどもクリニック富谷市へ移転新築

仙台市から隣接する富谷（とみや）市に移転新築したみやぎ乳児院と併設するこどもクリニックがそれぞれ9月1日、8月17日にオープンしました。富谷市は2023年の人口が5万2千人で、総人口に対する年少人口（0～14歳）の割合が15・1％で、全国平均（11・5％）、宮城県平均（11・8％）を大きく上回り、独自の子育て支援政策などで子どもにやさしいまちづくりを推進しています。若生裕俊市長に同市の魅力と済生会への期待などを聞きました。（本部広報室）

――富谷市は仙台市のベッドタウンとして、人口が増え続けています。

若生　黒川郡富谷村だった1960年から人口は増加し続け、63年に5000人を超え富谷町に、2012年には人口5万人を突破し16年に富谷市となりました。

――周辺の市町村と合併せずに、単独で発展してきた自治体は全国的にも珍しいのでは？

若生　厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所によると、当市は東北地方では唯一2045年まで人口が増え続けると推計されています。そこからさらに15年後、2060年まで人口が緩やかでも増え続ければ「100年間、人が増え続けるまち」を達成できます。

――緑が多く、おしゃれな街並みが印象的です。

若生　住みよさを表す指標（安心度、利便度、快適度、富裕度）について偏差値を算出して順位付けする「住みよさランキング」（東洋経済新報社実施）では宮城県で4年連続1位、住民を対象に居住満足度をアンケート調査によって評価する「住みこちランキング」と「住み続けたい街ランキング」（いずれも大東建託株式会社実施）では東北でそれぞれ4年連続1位、3年連続1位となっています。生活利便性や行政サービスなどが高く評価される一方、観光資源や交通アクセスなどが課題になっています。

市役所入口の総合案内では住民の困りごとなどにすぐに対応する

2045年まで人口が増え続けると推計される富谷市。写真は市庁舎

市役所玄関、市が誇る数々の指標を記した垂れ幕の前で。左は聞き手の本部広報室・河内淳史と杉山菜央

――具体的に言いますと？

若生　市民目線でスピード感を持つことを心がけています。一例を挙げると、新型コロナの特別定額給付金（国民1人あたり10万円）では職員総動員で取り組みました。

――それは大変だったのではないですか。

若生　私は日頃から街なかで市民とよく話をしますが、当時、市民から「給付金はいつもらえるの」と聞かれました。各市町村が一斉に給付に向けて動き出す中、申請書の印刷などを業者に外部委託し、各戸に送付する従来の態勢では何カ月先になるかわかりません。少しでも早く給付する方法を職員と検討し、書類の印刷などは外部委託をせず自前で行なうことにしました。

――市役所のほか、公民館、スポーツセンターなど、市の施設にある複写機をフル活用して印刷し、市内で買い集めた封筒に入れて発送するまでを全職員が一丸となり休日返上で頑張ってくれました。配達は郵便局に頼んで繁忙期（年賀状配達）シフトで対応していただき、発送の翌日には全世帯へ配達が完了しました。後日、市民は職場で「富谷はもう届いたの」などと驚かれたようです。

子どもも暮らしやすい“まち”をつくる

――富谷市は子ども目線でまちづくりに取り組んでいると伺います。

若生　市の総合計画で「子どもにやさしいまちづくり事業」に取り組んでいます。子どもたちがまちの活動に活発に参加、彼らの声や力がまちづくりに反映されています。

――例えばどのようなことがありますか。

若生　市内の小学生と私が直接対話する「とみやわくわく子どもミーティング」があります。公園の整備や交通の便などの改善点のほか、勉強やスポーツなど子どもたちが頑張っている話をたくさん聞くことができます。しっかりと自分の意見を伝える

※写真撮影時のみマスクを外しています

新施設開所式

宮谷市の子どもたちとの取り組み

「とみやわくわく子どもミーティング」では小学生がまちづくりの意見を積極的に

歩道橋の修繕では子どもたちが色を選んだ

子どもたちの姿にいつも感心します。

――市長室に飾られている書に「子どもたちをまちの財産にしたい」とあります。

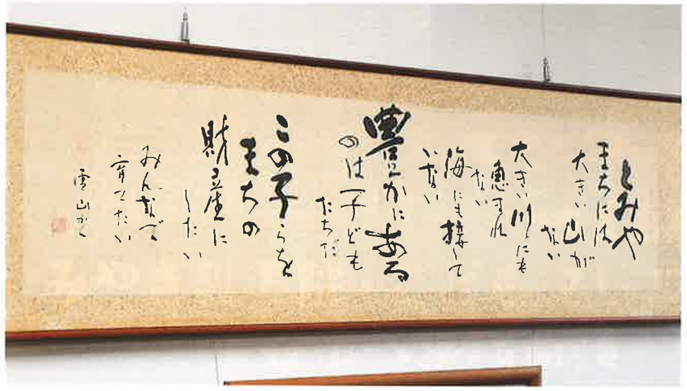
若生 前々町長が大切にしていた言葉です。「とみやまちには大きい山がない　大きい川にも恵まれない　海にも接していない　豊かにあるのは子どもたちだ　この子らをまちの財産にしたい　みんなで育てたい」。これまで本市で連綿と受け継がれてきた子育て政策はここに集約されています。

――みやぎ乳児院とこどもクリニックは、地域の子育て支援に力を入れていきます。済生会に期待することは何ですか。

若生 東北で最も年少人口の多い自治体であり、子どもにやさしいまちづくりを実践する本市としては、子どもの健康と生活を支え、守ってもらえる大きな後ろ盾になっていただける貴会は心強い存在です。今後の富谷市、周辺地域の児童福祉・医療の社会インフラを築く上で重要な役割を果たしていただけると思います。

――乳児院は入所する乳幼児の養育だけではなく、子育ての悩みを持つ地域の保護者の味方でもあります。

若生 育児相談や地域交流などで子育て中のお母さんやお父さんが安心して訪れることができる施設にしてほしいです。



――こどもクリニックでは新たに小児アレルギーの専門医を加え診療体制が強化されました。小児科の一般診療や予防接種も行ないます。

若生 子どものアレルギー疾患が増えていると聞きますので期待しています。こどもクリニックは新型コロナ感染症の経験から感染室、非感染室への動線を確保するなど、随所に感染対策への配慮が行き届いています。病児・病後児保育も十分に配慮された環境が用意され、安心してお任せできます。

行政は市民のために働く 患者のために働く済生会と志は同じ

――医療機関では職員が目的を共有、業務を分担しつつも連携して患者を支える「チーム医療」に取り組んでいます。行政サービスはどうですか？

若生 市役所は市民が楽しむ目的というよりは、困り事や相談事を抱えて訪れます。そういった心配や不安をファーストタッチで和らげるために、例えば総合受付があります。市民の声に耳を傾け、すぐ対応することを重視しています。

――お伺いした話の「市役所」を「病院」に、「市民」を「患者」に置き換えれば、貴市が行なう「市民目線のサービス」の本質は本会の目指すものと共通すると感じます。

若生 そうですね。行政機関も医療機関も福祉施設も市民、患者本位のサービスを追求する使命があります。市・企業・団体・住民が一体となってまちづくりに取り組んでいきたいですね。

SAISEI 特別取材 December 2023

新たな地に根差して 子どもの健康と成長を支える

遠藤清之施設長（左）と若生信子副施設長

［みやぎ乳児院・こどもクリニック］移転新築

宮城県済生会は8月、乳児院と併設するこどもクリニックを仙台市からおよそ北へ10キロの富谷市に移転新築しました。10月27日に現地を訪れ、新たな地域で子どもたちの健康と成長を支える活動を取材しました。

（本部広報室　河内淳史・杉山菜央）

みやぎ乳児院

みやぎ乳児院は移転新築を機に大舎制からこれまで経験のない小規模ユニット（グループケア）に移行しました。定員は35人。新生児と乳児が暮らすユニットが一つと乳幼

職員が描いたイラストを施したエレベーターの扉

心理治療室では入所児に対し遊びを通して心理的ケアを行なう

児が暮らすユニットが二つあります。乳幼児ユニットでは異なる月齢の子どもたちが兄弟のような関係で一緒に過ごすことで、より家庭的な雰囲気の中で暮らします。一方で職員はユニットの中の各ホームに分かれて子どもと生活を共にしながら支援していくことになります。

遠藤清之施設長は「これまでとは全く違った体制での支援となるため、職員と共に試行錯誤している。スタッフの応援体制やカンファレンスによる情報共有を図り、各ホームで職員が孤立しないようにしている」と語っていました。

若生信子副施設長は「子どもたちが新しい施設に慣れるため引っ越しは段階的に行なった」といいます。新しい施設の写真を載せて絵本のように作って読み聞かせたり、子どもたちと移転先の施設で過ごしたりして、少しずつ慣れさせていったそうです。

新しい施設には子どもたちの心理的ケアを行なう「心理療法部門」と入所児が家庭復帰するための支援や里親とのマッチングなどのために試験的に生活できる「家庭支援ユニット」があります。前者は親から受けた身体的・心理的虐待に伴うストレスやトラウマに心理士が対応するところです。また、後者では入所児が慣れ親しんだ施設から家庭や里親の下で生活するための準備を行ないます。乳児院では3歳くらいでの退所となり、入所した子どもは必ず施設から離れていくことになります。少しでも入所している乳幼児が次の生活（家庭、里親、児童養護施設など）に順応していけるように再出発に向けた「リービング・ケア」を重視しています。

入所児がのびのびと楽しく遊べるプレイルーム

小規模グループケアの保育では細かな情報共有を図っている

乳幼児といえども環境変化への対策が重要。職員はケアをしながらの引っ越しだったので苦労も多かった

済生会は関係機関と連携して、感染症等のために保育所に行けない子どもを預かる「病児・病後児保育事業」や乳児院が子どもを一時預かりする「子育て短期支援事業」を通して親の育児疲れや不安を取り除くことで虐待防止に取り組んでいます。さらに、地域のニーズを探りながら新たな事業についても企画しています。

みやぎこどもクリニック

みやぎこどもクリニックは8月17日に開院。地域の子どもたちの小児科一般診療や乳幼児健診、予防接種を実施。また、小・中学校、富谷市・とみや子育て支援センター「とみここ」と連携して子どもたちの心と体の健康を守っています。

診療所内は感染エリアと非感染エリアに分かれ、待合室だけでなく入り口がそれぞれ分かれています。インフルエンザなど感染力が強い疾患の疑いがある場合は隔離室で診察します。

高橋安佳里医師（左）と院長の内田崇医師

今年7月に赴任した高橋安佳里医師は小児アレルギーが専門。アトピー性皮膚炎や食物アレルギーなど、子どもの患者が増える中で、「アレルギーは早期介入ができれば就学前に改善するケースがある。将来は当院で食物経口負荷試験を実施し、富谷市のアレルギー診療の中心になりたい。さらに小児アレルギー専門看護師の育成にも力を注ぎたい」と抱負を語っていました。

診療所では子どもの心の診療も行なっています。内田崇院長は「不登校や発達障害に悩む親子の力になりたい。精神科領域のケアは医師だけでなく、看護師、臨床心理士など多職種で関わることが重要」と指摘

2023年8月、仙台市から富谷市に移転新築した

小児アレルギーが専門の高橋医師

した上で、「発達支援事業に取り組む済生会の情報を共有していきたい」と話しています。

また、「当院は看護師と患者さんとの会話が多い。患者さんから母乳や育児の相談に看護師が積極的に応じていて信頼関係を築いている」とも語っていました。

クリニックのもう一つの役割に乳児院の子どもたちの健康管理があります。県内にはもう一つ乳児院がありますが診療所併設は済生会だけです。乳幼児の健康管理では日々の観察の中での早期発見・治療が重要な役目を果たします。被虐待児や未熟児などの病虚弱児が多い乳児院にとって診療所が併設されていることは強みです。

新たな地に根差し子どもたちの健康と成長を支える

宮城県済生会は1931年に一般診療を行なう仙台診療所を開設、1996年度に小児科が追加され、こどもクリニックの原形である宮城県済生会診療所となりました。乳児院は1952年に県が宮城県乳児助産院を開設、1973年に乳児院開院、2011年度に済生会に移譲されました。

診療所の開設から92年、乳児院と診療所は拠点を富谷市に移しました。加藤秀郎支部長は「乳児院では地域住民に対する子育ての短期入所や相談支援事業などを、こどもクリニックでは一般診療や予防接種等を行ない、新たな地に根差して子どもたちの健康と成長を支えていきたい」と話していました。

旧建物に壁に描かれた子どもたちの寄せ書き。感謝のメッセージが寄せられた

伊豆医療福祉センターまつり

東京五輪自転車銀メダルの梶原悠未選手

たなかみどりさん

山下正行伊豆の国市長

渡邊誠司施設長

1100人が来場

センターの活動を地域にPR

〈静岡〉伊豆医療福祉センターは11月11日に「伊豆医療福祉センターまつり」を開き、約1100人が来場しました。

当センターでは平成23年から、重症心身障害児(者)や発達障害のある方へ診療やリハビリテーションなどの活動を地域の方々に知ってもらうために、建物を一般公開していますが、今年は「伊豆医療福祉センターまつり」としてプログラムを増やして実施しました。

開会式では渡邊誠司施設長が開会を宣言。来賓の山下正行・伊豆の国市長が「今日はたくさんのイベントがあります。皆さん一緒に楽しみましょう」と挨拶しました。親子連れの参加者が多く、輪投げやゴム鉄砲などのゲームの他、医師や看護師のユニホームを着た記念撮影を楽しんでいました。

ステージでは地元シンガーソングライターのたなかみどりさんのライブや、沼津市のダンススクールのインストラクターや生徒が踊りを披露。伊豆医療福祉センターの利用者で結成された太鼓グループ「どんつく」と、障害を持つ子どもたちで構成されている地元の太鼓チーム「やわら太鼓」の合同演奏などが披露されました。

ほかにも県内の福祉事業所によるパンやお菓子、工芸品などの販売、協賛企業・団体による工作体験や福祉車両の展示も行なわれ、子どもから大人まで楽しんでいました。(本部広報室　河内淳史)

DSTメンバーと病棟看護師の病棟ラウンド。体調確認のための声かけや、写真を見せながらの会話、身だしなみのチェックなどを行なう

認知症サポートチーム（DST）のメンバー。左から社会福祉士、認知症看護認定看護師、医師、薬剤師、理学療法士

高齢患者への認知症ケア

院内デイケアにより患者の機能維持と環境改善につなげる

〈広島〉呉病院
認知症看護認定看護師
佐崎美衣子

当院が位置する呉市の高齢化率は35％以上と全国平均より高く、高齢の入院患者が多くなっています。その中でも認知症や認知機能の低下した患者は6割以上を占め、認知症ケアの重要性が近年増していました。

そこで当院では、認知症看護認定看護師が中心となり2019年5月に認知症サポートチーム（DST）を発足。認知症や認知機能の低下があっても安心して療養できる体制づくり・サポートとして、各病棟のラウンドやカンファレンスなどを行なってきました。

その活動の一環として、昨年10月から看護部認知症ケアリンクナース会・リハビリスタッフと協働で、院内デイケアを開始しました。開始のきっかけは、病棟スタッフが認知症高齢者のケアで疲弊している状況や、入院患者が普段とは違う場所での療養生活で混乱したり、1日の大半をベッド上で過ごすことで活動性が低下したりといった状況が多く見受けられたことです。院内デイケアを通して、入院患者がベッドを離れ交流の機会を持つことで気分転換やさまざまな機能維持につながり、スタッフ・患者双方が穏やかな気持ちで過ごせればと考えました。

筆者

個々に合わせたサポートで「笑顔の時間」づくり

院内デイケアは、認知症看護認定看護師、認知症ケアリンクナース、病棟看護師、看護補助者、リハビリスタッフで担当。対象者は、認知症ケアの対象となる認知症高齢者自立度判定Ⅲ（日常生活に支障を来すような症状・行動や意志疎通の困難さが時々見られ、介護を必要とする状態）以上の患者を中心に、入院生活に混乱を来している患者や、活動性が低下している患者です。実施場所の都合上、各部署（病棟）8人を上限とし、認知症ケアリンクナースとリハビリスタッフで選定しています。

病棟デイルームで部署ごとに週1回、14時から1時間程度で実施。最初の20分程度はリハビリスタッフによる認知機能を刺激する頭を使った体操を行ないます。その後は週替わりでカレンダー制作や脳トレ問題、ゲームなどのレクリエーションに取り組んでいます。参加者が自身で色を選んだり手先を使ったりできるように、スタッフは個々人の機能を見ながらサポートしています。

カンファレンスでは、DSTメンバーと病棟スタッフがせん妄予防に関する対応等について活発に意見交換

【病院全職員とともに・DSTメンバーの活動】

DSTメンバーと病棟看護師による病棟ラウンドで、体調確認のための声かけ

DSTメンバーで作成した、レクリエーションで使用する季節の絵合わせカード

院内デイケアの前半は、認知機能を刺激する体操などを取り入れた集団リハビリの時間

［右］体操の後は週替わりのレクリエーション。カレンダー制作では塗り絵や貼り絵で手指を使い脳を刺激する ［上］季節を感じられるテーマで工作を実施。6月は「あじさい」

院内デイケアの取り組みを紹介し、参加者の作品を展示

認知症看護認定看護師と有志で敬老の日のカードを作成。病棟看護師のメッセージを添えて入院患者にプレゼント

実施の際はパーテーションを使い仕切られた空間をつくることで、参加者が集中して取り組めるよう工夫しています。また、必ず日付や曜日・時間について説明し、見当識が保たれているかを確認。季節や昔の話を交えながら進行し、参加者同士の会話につなげられるよう取り組んでいます。参加者からは「昔こんなことしたね」「慣れないので疲れるけど楽しい」といった声もあり、笑顔の時間づくりができていると思います。

なお、参加については個人の意思を尊重し無理強いはせず、参加時間も各自の状況に応じて都度調整を行なっています。

患者の活動性が向上 穏やかに過ごせるように

院内デイケアへの参加をきっかけに、リハビリ室への出棟ができるようになった、日中の臥床時間が減少したなど、入院患者の活動性の向上につながっています。また、患者自身の生活リズムが整い穏やかに過ごせる時間が増えることで、病棟スタッフも穏やかに対応できるよう

伝えたい！ケアマネの役割 リーフレットでわかりやすく紹介

利用者との関係づくり

〈山形〉
特養ながまち荘
済生記者
高見友郁

になりました。

今年5月には近隣の医療機関が院内デイケアを見学に訪れ、「思っていた以上に本格的に取り組んでいて驚いた」「患者さん同士の交流にもなっており、とても参考になった」などの感想をいただきました。

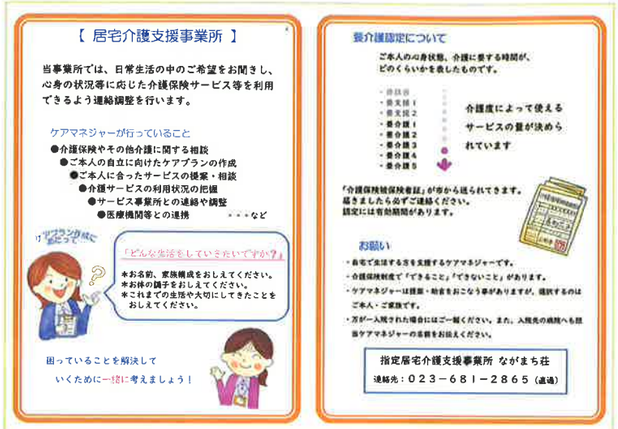
今後は、各部署でアイデアを出してもらい、部署独自の活動につなげていけるよう働きかけていきます。また、夕方以降も患者が落ち着いて過ごし、穏やかに眠りにつくことを促す「ナイトケア」の実施についても検討中です。認知症や認知機能の低下した入院患者が少しでも安心して過ごせるような取り組みを考えていければと思います。■

当荘居宅介護支援事業所には4人のケアマネジャーが在籍しています。各ケアマネは35～40人の利用者を担当。利用者の自宅を毎月訪問してモニタリングを行ない、心身状態の異常やサービスの活用状況を確認しています。

訪問時に利用者本人や家族と話していると、「ケアマネの役割が十分に伝わっていない」と感じることもあります。例えば、トイレの修繕や日用品の買い物を頼まれるなど、ケアマネを「御用聞き」だと思っている方も。また、ケアマネが「自立支援に資する居宅サービス計画書」を作成する際に、楽をしたいので車椅子に乗りたい等、自立を阻害する恐れのある過剰なサービスの利用を希望されることもあります。もちろん話し合いの上で計画を練りますが、こちらの提案に不満を感じた利用者・家族から強い言動で責められ、心を傷める場面もありました。

筆者

一方で「入所する施設はケアマネが決めて」と重要な場面で判断を委ねられ困惑したり、逆に大きなけがや入院などの大切な連絡をいただけなかったりすることも。特にコロナ禍では訪問自体が制限され、電話でのやりとりをいくら重ねても、利用者との信頼関係を結ぶことはとても難しいことだと感じました。



作成したリーフレット（表・裏）。イラストは筆者のオリジナル

とにかく読みやすいものに

そんな折、昨年7月に開催された主任介護支援専門員研修に職員2人（高橋由紀、筆者）が参加した際、講師から自施設でケアマネの役割を紹介する冊子を作成したことを聞き、自分たちでも作ってみようと、リーフレットの作成に取りかかりました。

目的は大きく二つ。一つ目は利用者にケアマネの役割を知ってもらうこと、二つ目は良い援助関係を築きカスタマーハラスメントから身を守ることです。

ケアマネジャー4人が集まり居宅会議を週1回実施。何でも話し合える環境

モニタリングのため利用者宅を訪問する武田紀子ケアマネ。毎月40件以上訪問する

地域の民生児童委員の研修でリーフレットを配布し、高橋由紀ケアマネが説明を行なう

作成にあたって特に大事にしたのは、押しつけがましい印象を与えないようにすること。また、配布対象の高齢の利用者やその家族を意識し、とにかく「読みやすいもの」を作りたいと考えました。

イラストは著作権に触れないよう、筆者が描いたものを使用。PC作業が得意な高橋由紀ケアマネが中心となって文言や色、レイアウト等にこだわり、しっかりと手に取り読んでもらえるよう会議を重ねながら仕上げていきました。

認識のズレをなくし良好な関係を築くツール

今年4月、完成したリーフレットを施設内の運営会議で報告。新規利用者の面接時に持って行く程度の活用を想定していましたが、職員から「福祉系の学校へ講師に行く際に持参して生徒に見せたい」「地域の民生児童委員の研修会で配布したい」との声もあり、ケアマネが直接持参し説明する機会もいただきました。また、機関誌「済生」7月号「トピックス」への掲載後、記事を見た他施設のケアマネから「ぜひ見たい」との連絡もあり、自分たちの想像以上に興味を持ってもらえたことにとてもうれしくなりました。

配布後半年がたちましたが、利用者・家族からは「これって、ケアマネにお願いしてよいことなんだっけ？」ときちんと聞いてもらえるようになり、ケアマネができること・できないことへの認識がズレる前に互いに確認し合えるようになったと感じます。さらに、「介護保険証が届いた」「通院して薬が変更になった」など小さなことでもすぐに連絡をいただけるようになりました。

このリーフレットは、できないことを伝えて線引きをするためではなく、あくまでも良好な援助関係を築くための一つのツールです。最近では家族の引きこもりやヤングケアラーなど、複合的な問題を抱える処遇困難ケースも多くなってきており、地域ケア会議等での行政との連携も欠かせません。

今後は、そうした行政の職員や病院のソーシャルワーカー、薬剤師などにもケアマネの役割を適切に理解してもらうため、リーフレットの活用の幅をさらに広げていきたいと思います。■

筆者が担当する利用者の退院支援のため病院へ。リハビリを見学し、理学療法士の説明を受ける

行政の各機関も参加し行なわれる処遇困難ケースの地域ケア会議に管理者・高橋千明ケアマネが出席

〈福岡〉飯塚嘉穂病院で「済生会フェア」

イベントやグルメが盛りだくさん

炭谷理事長、リングに立つ!

11月3日に第4回「済生会健康フェア」を開催。「緩和ケアガーデンリニューアル記念～感謝と絆～」をテーマに5年ぶりに病院で実施し、約1400人が来場しました。

屋外ステージで迫康博院長が開会を宣言、福岡県立稲築志耕館高等学校の和太鼓演奏、女性アーティスト「トリオフォレスト」のアンサンブル、地元の即興劇団「アンドモザイクス」の演劇などが披露されました。

病院内では無料の健康測定やリハビリ体験を実施、地元のフレイルサポーターや麻生飯塚病院のリハビリスタッフと協働したフレイル予防体験、内視鏡検査や調剤などのお仕事体験、本会の歴史パネルや古物を展示した「済生会の歴史展」も開かれました。

消防車や白バイの緊急車両展示、飯塚市のゆるキャラ「ぽたぼん」などと一緒に写真を撮ったり、飯塚嘉穂ミニ動物園ではヤギやモルモットなどの動物たちとの触れ合い体験では子どもたちの笑い声が響いていました。

フェアのために設営されたリングでは、九州を中心に活動しているプロレス団体「九州プロレス」によるちびっこプロレス教室やイベント試合が行なわれました。リングでは、炭谷茂理事長の講演も行なわれました。リングアナウンサーが「済生会理事長炭谷茂の入場です!」とアナウンスすると、「We are the Champions」の曲に合わせ炭谷理事長がリング上へ、観客からは「理事長コール」が沸き起こりました。

講演後は緩和ケアガーデンでトリオフォレストと当院音楽バンドK's Music Clubのコラボ演奏の中、クラウドファンディングで美しく整備された緩和ケアガーデンが披露。炭谷理事長と迫院長による植樹も行なわれ、緩和ケアガーデンの改修プロジェクトが完結しました。

新型コロナ感染症対策のため、フェアの案内を制限しましたが、多くの方々にお越しいただきました。露店コーナーではJAふくおか嘉穂桂川支所の秘伝の唐揚げ、地元名物揚げ出しオムレツ、無添加のジェラートや地元産野菜を使ったピザなど13の人気店が並び、地域の方々も病院スタッフも楽しめるイベントとなりました。

(飯塚嘉穂病院　済生記者　松岡亜希)

緩和ケアガーデンのリニューアル記念

済生会はソーシャルインクルージョン推進計画を策定しました。
無料低額診療もなでしこプランも、この中に含まれます。
だれも排除されないまちづくりを目指し、
全支部・施設が1696事業を展開します。

ソーシャルインクルージョン

地元ロータリークラブで つなサポを紹介

10月4日、宇都宮市内で開催された宇都宮陽東ロータリークラブの例会に約50人が参加し、当院の稲見一美地域連携課長が、宇都宮市つながりサポート女性支援事業の説明を行ないました。

講話の機会は、同クラブの山口雄子社会奉仕委員長の依頼により実現したもの。稲見課長は済生会の成り立ちをはじめ、当院なでしこプランの地域での活動が〝つなサポ〟の事業の受託につながった経緯等を説明し、事業概要や取り組みについて「生理の貧困」に関する事例も交えて紹介しました。

川人健司クラブ会長からは「フードバンクへの寄付など私たちにできることから少しずつ始めて、協力・支援していきたい」と、こころ強いお言葉をいただきました。

（地域連携課　秋山綾香）

〈栃木〉宇都宮病院

つなサポ出張相談会に50人 乳幼児を抱える女性も多く

10月6日、宇都宮市つながりサポート女性支援事業の一環で、姿川地区市民センターで女性のための出張相談会を開催。約50人の来場者に対し、当院の大塚美幸係長をはじめMSW4人で対応しました。

インスタグラムでの開催告知を見て来た方も多く、そのうちの一人（40代の女性）は「生活に困窮し、貧血の治療を自己中断している。60代の母親も持病があるが、経済的な不安が大きく1年以上受診が途絶えている」とのこと。

後日、相談を受けたスタッフは最寄りの地域包括支援センターと連携し、生活実態の把握と早期支援につなげるため、緊急で家庭訪問を実施しました。

悩みがあっても相談場所が分からず困っている人は意外と多いもの。今回の相談会を通じて、適切な相談場所に関する情報提供の必要性を改めて強く感じました。（地域連携課　秋山綾香）

〈埼玉〉川口総合病院

「多職種・多機関での連携」テーマに 生活困窮者支援ネットワーク協議会

10月17日、当院で第16回生活困窮者支援ネットワーク協議会を開催。オンサイトのみの開催でしたが、行政やNPO法人など地域の関係機関から62人が参加しました。

今回のテーマは「多職種・多機関での連携」。川口市社会福祉協議会の影山大介氏が連携の生きた事例を紹介し、その後ワールドカフェ方式で「連携したことでうまくいったこと、助かったこと」について、少人数のグループに分かれて話し合い、情報を共有しました。

オープンな雰囲気の中で自分の経験を語り、また他メンバーの経験を吸収することで、テーマについて学びを深めるとともに、メンバー間でのつながりを強めることができました。

（医療福祉事業課　柳光季恵）

イオン山形北店で健康講座 住民と心の距離を縮める機会に

山形済生病院

10月14日、イオン山形北店の26周年祭に出展し、健康講座を実施しました。

はじめに、大友純副院長（循環器内科）が「高血圧の話」と題して講演。続いて、健康増進センターめぐみの冨樫勇作健康運動指導士の指導で「脳と身体に効く楽々体操」を行ないました。参加者は50人ほどで、楽しみながらも真剣に取り組んでいる姿が印象的でした。

終了後は、当院の機関誌や無料低額診療事業のパンフレット、済生会のアメニティを配布するなど広報活動に努めました。

病院外へ出向き実際に地域の人々と関わることで、健康意識の高さを感じることができました。また、済生会や病院のことを知ってもらうことで、心の距離を縮める機会にもなりました。

（医療福祉相談室　高橋　鈴）

京都済生会病院

生活困窮者支援事業連絡会 ケース担当者会議

11月1日、当院なでしこホールで「済生会生活困窮者支援事業連絡会ケース担当者会議」を開催しました。

当日は当院職員7人含め、長岡京市・向日市・大山崎町の行政機関の生活保護担当者・生活困窮者支援担当者・社会福祉協議会担当者9人が参加。最初に、宮部剛実事務部長が当院の取り組みについて報告しました。続いて、福祉相談室から無料低額診療事業に関する事例報告を行ない、なでしこプランの取り組みと済生会フェアでの2市1町の社会福祉協議会とのコラボ企画「フードパントリー」の取り組みについて話しました。

意見交換では、参加者から物価高騰が続き食糧支援を求める方が増えている現状報告や、無料低額診療事業の利用方法について質問が寄せられました。

（福祉相談室長　島田　浩）

ソーシャルインクルージョン

地域の自治公民館で出張相談会 住民が気軽に立ち寄れる場に

〈栃木〉済生会高齢者ケアセンター

10月28日、地域の自治公民館で出張相談会を開催し、雷雨の荒天にもかかわらず地域住民10人が参加しました。この会は「地域における公益的な取組」の一環として、当センターがある宇都宮市富屋地区（13地域）の住民を対象に、当センター職員がアウトリーチによる活動を行なうもの。介護相談、健康増進の啓発、さらには生理用品配布などを実施しています。

来場者からは「地域に施設があることは知っていても、サービス内容や利用方法はわからない部分が多い。自宅近くで気軽に立ち寄れる相談会は参加しやすく参考になった」との感想をいただきました。来月以降も各地域の自治公民館での開催を予定しています。

（済生記者　川上藍美）

静岡済生会総合病院

外国人のための無料健康相談と検診会　11国籍、100人が来院

「外国人のための無料健康相談と検診会（外国人検診会）」を10月15日、当院で実施しました。当院職員のほか、市役所や近隣医療機関職員、学生、通訳ボランティアなど97人がスタッフとして参加しました。

本会は「外国人のための無料健康相談と検診会実行委員会」の主催で行なわれています。言葉が通じない、健康保険がないなどさまざまな理由により医療サービスを受けられない外国人とその家族に、無料で検診や健康相談の機会を提供します。

当日はフィリピン・ミャンマー・インドネシアなど11国籍、100人が来院し、身体計測や血液検査、栄養相談などを受けました。

受診した人からは、「簡単な日本語で説明してくれたのでよかった」などといった声がありました。

（済生記者　酒井あい）

3法人合同で地域と福祉をつなぐ「いちごカフェ」

10月18日、済生会を含む3法人合同で「いちごカフェ（出前サロン）」を地域薬局で開催しました。

県内の社会福祉法人が地域の生活困窮者や福祉の制度の狭間で困っている人々への相談・支援を行なう「いちごハートねっと事業」の一環で、当センターからは看護師・管理栄養士・介護支援専門員の3人が参加。来場者約20人に対し、介護相談や食のアドバイスなど、専門職の視点で一人ひとりの困りごとに耳を傾けました。

来場者からは「福祉のプロのみなさんから話を聞くことができてよかった。とても参考になった」との声がありました。

地域の人々の公益的活動への期待や地域ニーズの把握ができ、また、他法人との合同開催によって施設間の連携をより深める絶好の機会となりました。

（介護支援専門員　大嶋小貴子）

4年ぶりのへき地健診 健康講座や健康相談も

〈三重〉松阪総合病院

11月3日、総勢21人の当院スタッフが大台町健康ふれあい会館に出向き、出張健診・健康相談を行ないました。

事前に申し込んだ50人の住民が、血圧や簡易血糖測定、心電図測定などの検査や、腎臓内科専門医による診察を受けました。

また、腎臓内科専門医による「生活習慣病と腎臓病の深い関係」をテーマにした健康講座、糖尿病看護認定看護師や管理栄養士などの健康相談の時間も設けました。受診者からは「腎臓がいかに健康寿命に深く関わっているかよくわかった」「近くでこのような機会を作っていただきうれしかった」などの声をいただきました。

コロナ禍の影響で4年ぶりの実施となりましたが、今後は回数を増やし、一人でも多くの住民の参加につなげて健康の大切さを伝えていきます。

（健診センター　薗部修一）

山口地域ケアセンター

インクルーシブ社会の実現に向け 炭谷理事長が基調講演

炭谷

10月31日と11月1日、シンポジウムと大学に炭谷茂理事長が招かれ、「インクルーシブ社会の実現に向けて」をテーマに基調講演を行ないました。

1日目は、矯正・更生保護や生活困窮者支援に関わる相談支援機関等20団体で構成する「山口市再犯防止推進協議会」主催のシンポジウムで講演。シンポジウムでは山口地方検察庁、山口刑務所、山口保護観察所が社会復帰に向けた福祉的・経済的支援策等の取り組みを紹介し、今後の再犯防止に必要な体制づくり等について意見交換も行なわれました。

翌日は山口大学経済学部で講演。200人を超える学生が聴講し、誰もが地域で認められ支え合える社会を実現するための考え方について理解を深めました。（済生記者　楊　玉華）

二日市病院が「済生会フェア」

摂津氏(右)

炭谷理事長

講演会で挨拶する壁村哲平院長

人気イベント 健康測定に長蛇の列

元ソフトバンク 摂津氏トークショー

〈福岡〉二日市病院が10月22日にイオンモール筑紫野で「済生会フェアｉｎイオンモール筑紫野２０２３」を開催し、約１５００人が参加しました。

このフェアはイオンモールと済生会の「未来に向けたまちづくり協定」に基づくもので、イオンモール筑紫野全面協力のもと、１階のイベント広場と３階のイオンホールで開かれました。

イベント広場では３カ所に分かれて①健康測定②健康相談会③子どもお仕事体験が行なわれました。

健康測定では血管年齢測定、骨密度測定、体組成測定、脳年齢測定を実施。開始直後から参加者が途切れることなく長蛇の列ができていました。

健康・福祉相談では看護師・薬剤師・管理栄養士・医療ソーシャルワーカー・ケアマネジャーによる相談会を実施、参加者は体のことや、食生活、医療費のことなどを相談していました。またＢＬＳ（一次救命措置）の講習会をサプライズで実施、胸骨圧迫やＡＥＤの使用方法の体験には子どもや大人が真剣に取り組んでいました。

子どものお仕事体験では臨床工学技士・医師と一緒に腹腔鏡や内視鏡、電気メスなどの操作や、お菓子を薬に見立てた調剤を薬剤師と一緒にするなど子どもたちは楽しみながら病院の仕事を体験していました。

イオンホールでは、イオンモール筑紫野内にあるダンス教室からフラ&タヒチアンダンス「マーラエナニフラ&タヒチアンダンススタジオ」とヒップホップダンス「Dance Up!!!」によるステージショーが行なわれ、音楽に合わせて笑顔あふれるダンスを披露していました。

済生会の炭谷茂理事長が「済生会の目指すまちづくり」と題し講演しました。また、プロ野球解説者で元福岡ソフトバンクホークス投手・摂津正さんのトークショーではご自身の慢性骨髄性白血病の体験をもとに病気への向き合い方などを語りました。摂津さんは趣味や選手時代の裏話などを話し、会場を盛り上げていました。

その他、来場者向けの健康に関するクイズラリー、イオンモール筑紫野主催の「働く車展」にも多くの人が参加していました。

（二日市病院　済生記者　久冨大史）

イオンモールと済生会の“まちづくり”

報告　生活困窮者問題シンポジウム

小樽ウエルネスタウン構想と共に生活困窮者問題を考える

北海道済生会　ソーシャルインクルージョン推進室長　**清水雅成**

11月11日グランドパーク小樽で第12回生活困窮者問題シンポジウムを開催しました。本シンポジウムの題名は「小樽ウエルネスタウン発　誰もが自分らしく暮らせる未来を！」。現在北海道済生会で進めるウエルネスタウン構想で支援をいただいている団体を中心にシンポジストを構成し、それぞれ専門の立場で①医療・介護の充実②住民サービスの拡充と生活利便性向上③人口減対策と安心・安全なまちの三つの視点から、生活困窮者問題について話し、北海道内外から約130人が参加しました。

勝山貴之氏

炭谷茂氏

はじめに北海道済生会・近藤真章支部長が開会を宣言。来賓挨拶では小樽・迫俊哉市長の代読で勝山貴之保健福祉部長は「地域共生社会の実現に向けてご尽力いただいている済生会と強力に連携し、市民が生き生きと生活できるように次の世代へ引き継いでいきたい」と述べました。炭谷茂理事長は「ソーシャルインクルージョンの推進に皆さんのご協力をいただきたい」と挨拶しました。

近藤真章氏

櫛引久丸氏

基調講演では、日本財団・尾形武寿理事長が「みんながみんなを支える社会を目指して」と題し、日本財団の支援の仕組みや課題、日本が抱える課題の解決に取り組む活動内容を紹介。「当財団は子ども・高齢者・障害者などへの新しい支援の仕組みを生み出し、人々が互いの痛みや苦しみを分かち合うことができる社会にしたい」と訴えました。

片桐由喜氏

その後、小樽商科大学・片桐由喜副学長がコーディネーターを務め、生活困窮者への支援をテーマにパネリスト4人が議論を交わしました。

しんぐるまざーず・ふぉーらむ北海道・平井照枝代表は「ひとり親世帯に対して固定観念にとらわれずに傾聴することが支援につながる」と語りました。

平井照枝氏

小樽市福祉保健部福祉総合相談室・大口明男主幹は仕事や生活で悩んでいる人への相談支援事業「たるさぽ」を紹介しました。

株式会社ドリームジャパン・長原和宣代表取締役は「刑務所出所者への支援事業として、再犯を防ぎ新たな被害者を生まないためには、企業が身元引受人になって就労の場と住まいを確保することが大切である」と話しました。

長原和宣氏

北海道済生会・清水雅成ソーシャルインクルージョン推進室長は北海道済生会が実施するフードバンクを紹介。「行政や企業各々が強みを生かして支援を必要とする家庭へ手を差し伸べたい」と言及しました。

清水雅成氏

大口明男氏

最後に北海道済生会・櫛引久丸常務理事が「生活困窮者は、現代の日本社会が抱える大きな問題の一つである。その状況は多様で複合化しているため、支援方法も包括的、重層的なものにしていかなければならないと、このシンポジウムを通じて実感した」と挨拶し、会を締めくくりました。

尾形武寿氏による基調講演

【右上】130人が参加したシンポジウム。道外から訪れた人も　【右下】障害者就労支援施設で製作された商品の販売も行なわれた
【左】小樽は歴史を感じられる街並みが美しい。上は北一硝子、下は小樽運河

西尾まり

Mari Nishio

天才子役と謳われ、その後も第一線で活躍を続ける俳優・西尾まりさん。大人になってからの役柄で多いのはダントツ1位で「看護師」。点滴を扱う手つきも慣れたもの、あまりの手際のよさに医療指導のプロも驚いたそうです。そんな西尾さんが次の舞台で演じるのは？ また、子育てしながらの役づくりについて聞きました。

Text：みやじまなおみ
Photos：安友康博

Hair & Make-up：藤原羊二（UM）

この人 Vol. 163

”看護師役“のスペシャリスト「今が一番楽しい」そのワケは？

にしお・まり　1974年生まれ、東京都出身。5歳で子役デビュー。84年放送のドラマ「うちの子にかぎって…」の出演を機にお茶の間に知られる存在となる。それに続く「子どもが見てるでしょ」「パパはニュースキャスター」も話題に。人気子役として注目を集めた。その後、結婚、出産を経て、現在はお母さん役も。名バイプレイヤーとして多数のドラマ、映画で活躍するほか、舞台へも積極的に出演している。

「物語の設定は現代に近いのですが、とても懐かしさを感じる大人のファンタジーです。そして、言葉が美しい！ 唯一無二の個性を持つ草彅剛さんを主演に迎えて、一緒にこの世界観をお客さまにお届けしたいですね」と、『シラの恋文』について語る西尾まりさん。

ここで演じるのもやはり看護師。「なぜこんなに多いのかわかりませんが、病院にいそうなんじゃないでしょうか。それもベテランのちょっと怖い系。でも、自分が入院したとき、貫禄のある看護師さんに安心感を覚えたので、私でよければそれでいいのかな？」と笑う。

プライベートでは二人のお子さんを育てるお母さん。すると、台詞覚えも生活の場が中心になる。「以前は子どもが寝静まってから声に出して覚えていたのですが、最近は犬（愛犬せつ）の散歩中が定番。ブツブツ言いながら歩くので、その分、散歩が長くなりました。ただ、せつは保護犬なので、外が怖くて早く家に帰りたい。でも、私は頭に台詞を入れないと帰れない。そのせめぎ合いが続いています（笑）」

長いキャリアのなかでも、「今が一番楽しい」と西尾さん。「若いときは悩みに埋没していた時期もありましたが、結婚し、子どもを産んで、いろいろな壁を乗り越えたら、今を大事に、自分に『がんばれ！』とエールを送れるようになりました。人生経験に無駄はないんだなと思います」

シス・カンパニー公演『シラの恋文』

海が美しく一望できるサナトリウムにやってきた鐘谷志羅（草彅剛）。彼を迎え入れたのは、さまざまな事情を抱えた施設の住人や職員たち。そこで志羅には、ある運命に導かれた出会いが待っていた……。

■作：北村想　■演出：寺十吾

■出演：草彅剛、大原櫻子、段田安則、工藤阿須加、鈴木浩介、西尾まり、田山涼成　ほか

《京都公演》2023年12月9日（土）～17日（日）京都劇場／《福岡公演》2023年12月22日（金）～28日（木）キャナルシティ劇場／《東京公演》2024年1月7日（日）～28日（日）日本青年館ホール

口福にっぽん

吉井省一

済生会支部未設置県の逸品 1/7

75 錦玉菓子 ゆうたま

《菓游茜庵》 徳島県徳島市

済生会は2023年度からスタートした「第3期中期事業計画」で支部未設置県の支部設立（復活）をビジョンに掲げています。

口福にっぽんでは来年3月号まで、済生会支部未設置の7県の逸品を紹介します。

徳島県といえば、何はともあれ「阿波おどり」。毎年8月中旬ににぎやかに開催される徳島市は、まさに〝阿波おどりの街〟。街中には阿波おどりの銅像やモニュメントがあふれています。

しかも、お祭りの時期だけでなく、阿波おどり会館へ行けば毎日公演が催されていて、いつでも本場の踊りを鑑賞できます。

徳島関連のサイトに、県の位置がわからない方に向けて〝四国の右下〟なる表現がありました。なるほど、これならわかりやすい（笑）。徳島県には他にも鳴門の渦潮や祖谷のかずら橋など観光スポットが目白押し。海外でも人気を呼ぶ藍染めなどの伝統工芸品も多数あります。

宝石のような姿、弾むような食感は、和菓子の伝統技法“錦玉”を基に生み出された

四国育ちの素材を使った錦玉菓子

そんな徳島県で見つけたのが上品で可愛らしいスイーツ。四国ならではの果物をさりげなく使った逸品です。その名は「ゆうたま」。徳島市の『菓游茜庵』の菓子職人が丹精込めて仕上げた、宝石のように美しい和菓子です。

味は「柚子」「すだち」「山桃」「梅」「ゆこう」の5種類。「柚子」は名産地として知られる高知県北川村産。「すだち」は徳島県上勝町の提携農園で有機栽培されたもの。「山桃」は徳島県小松島産の定評ある阿波山桃。「梅」は蛍舞う山里徳島県美郷育ちのもの。「ゆこう」は柚香と書き、幻の果実と言われる希少な徳島県上勝町産の有機果実。どれも各地から味の良さで選び抜いた果実ばかりです。

和菓子というよりも洋菓子と呼びたいほどモダンな見た目ですが、実はお茶席で人気が高いとのこと。というのも、寒天を溶かしたものに砂糖や水飴で甘みをつけて冷やし固める「錦玉」という和菓子の伝統製法をアレンジして作られているためです。

三角錐のおしゃれな個包装を開くと、コロリと大型のビー玉サイズのキュートなお菓子が登場。キラキラと輝く美しい球体には、薄く砂糖がまぶしてあり、その下に透けるパステル調の淡い彩りがとても華やか。何粒か取り出してお皿に並べ、さて何色からいただこうかと悩むのも楽しいものです。

済生会支部未設置県

茜庵本店はJR徳島駅から徒歩で8分。道筋には徳島城址公園などもある（写真＝名勝として知られる旧徳島城表御殿庭園。入場料は大人50円）

よしい・せいいち　一般社団法人日本作詩家協会理事。コピーライター時代に老舗百貨店の食の通販誌で約30年執筆に携わり、試食した食品の数は1万点を超える。

伝統の技と革新的な発想が融合する茜庵の菓子。左は創業以来人気の代表銘菓「淡柚（あわゆう）」。中には柚子香る翡翠色の餡が。右は定番の一口菓子「和三玉（わさんだま）」。こちらは和三盆糖風味の羊羹で、季節限定の味も登場する

しばし見とれる彩りと上品な甘酸っぱさが魅力

さあ、それではさっそく一粒ずつ楽しんでまいりましょう。

まずは、黄色の「柚子」から。外を薄く覆っている砂糖の部分は、カリッと心地良い歯応えで、噛むと中の爽やかな果実の風味がほんのり漂ってきます。ゼリーよりも柔らかな食感で、柚子の甘酸っぱい香りにうっとり。

薄緑色の「すだち」は、さっぱりした甘みでジューシー、キリッとした後味の良さが際立ち、口中に清涼感が広がります。

赤みを帯びた「山桃」は、やさしい甘みがどこか懐かしい味わい。甘さと酸味のバランスが絶妙で、飽きの来ない味が特徴。

薄紫色の「梅」は、梅のマイルドな酸味と豊かな香りが生かされていて、梅本来の味を楽しみたいという方にはおすすめ。

白色の「ゆこう」は徳島県民でも知らない人がいるほど、幻の果実と呼ばれています。昔から〝香り柚子、酸味すだち、味ゆこう〟と言われているとのことですが、確かに他の柑橘類よりも味が一段深く感じます。

お茶席にも出されるだけあって日本茶に合うのはもちろんですが、個人的にコーヒーよりも紅茶に合うと思ったのは、柑橘系の味が多いので、レモンティー風な組み合わせを意識したからかも知れません。

入っている箱はカラフルで可愛くて捨てるのが惜しいくらい素敵と好評で、小物入れとして使っている方も多いようです。ギフトにしてもきっと喜ばれることでしょう。

店内には椅子とテーブルの略式の茶席も設えており、和菓子のコースやかき氷を楽しむこともできる

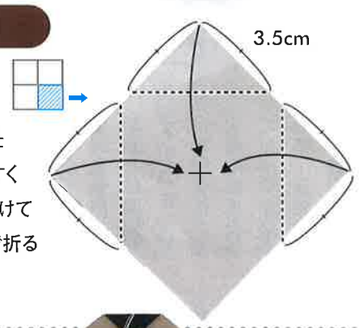
ゆうたま
［柚子・すだち・山桃・梅・ゆこう］　計18個
2,484円（税込・送料別）　賞味期限……常温約25日

お取り寄せ・お問い合わせは
菓游　茜庵
〒770-0852 徳島県徳島市徳島町3-44
TEL：088-625-8866（営業時間：9:00～18:00）
ホームページ：https://www.akanean-shop.com

飛べ飛べ高く やっこだこ

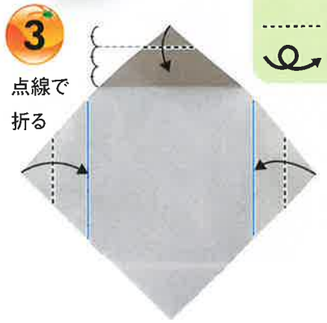
顔

1 1/4に切った折り紙にうすく中心線を付けてから、点線で折る



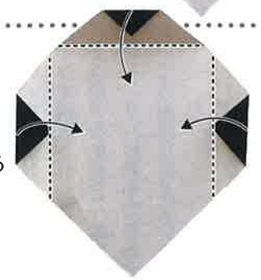
2 開く

3 点線で折る

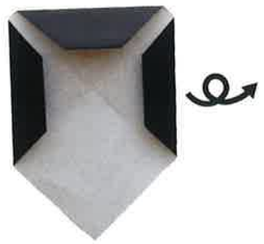


山折り
谷折り
裏返す

4 ①で付けた折り目で折る



5 裏返す



6 下の角を中心まで折る

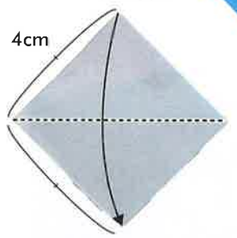
だれでもかんたん てづくりおもちゃ

7 点線で折って裏返す

8 丸シールやペンで顔を描く

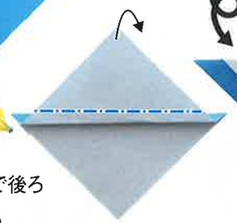
えり

1 一辺が4cmの折り紙を半分に折る

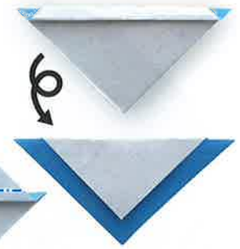


2 点線で折る

3 点線で後ろに折る

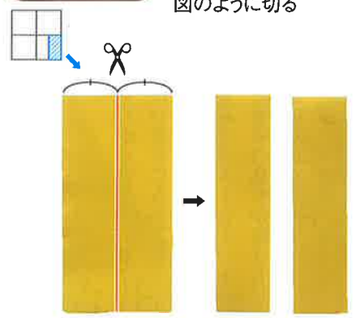


4 裏返す



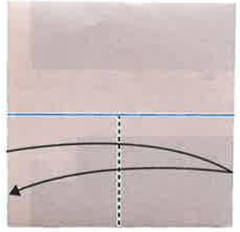
あし

1/8に切った折り紙を図のように切る

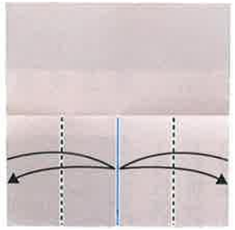


着物

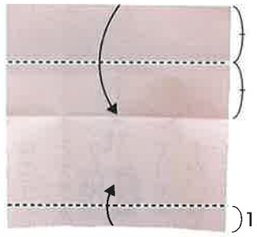
1 折り紙に中心線を付けてから、下半分だけ折り目を付ける



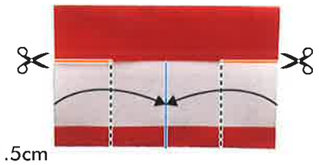
2 下半分を点線で折り目を付ける



3 点線で折る



4 図のように切り込みを入れて、②で付けた折り目で折る



5 角を折って、裏返す

6 えりをはさむように貼る

完成

顔をえりの上に、あしを中に差し込んで貼って完成

【いまいみさ】手づくりおもちゃ作家。折り紙や牛乳パックなどをリサイクルして手づくりの楽しさを伝えています。著書に「365日たのしい折り紙」(日東書院)、「12か月のおりがみ壁飾り」(講談社)など39冊。9月15日から新刊「1年中使える！決定版おりがみ図鑑」(講談社)発売。

動画もcheck!

作品・折り図：いまいみさ　おりがみ協力：株式会社トーヨー

全国で秋のイベント盛りだくさん。写真は〈福岡〉飯塚嘉穂病院の済生会フェア。撮影に協力していただいた方から後日「家族や仲間そして迫康博院長先生も一緒に写真を撮って頂き素敵な思い出になりました。楽しい一日を過ごさせてもらいました(^^)」とお礼のメールをいただきました。

topicS

5年ぶり！ 和歌山城ウォークラリー

和歌山病院

第25回済生会和歌山病院糖尿病ケアチームウォークラリーを10月28日、和歌山城敷地内で5年ぶりに開催しました。

参加者は、まず病院に集合して血圧・脈拍・血糖・身長・体重を測定し、スタッフと一緒に準備体操を行なってから和歌山城に移動。

英肇統括副院長を中心に医師・看護部・臨床検査科・薬剤部・栄養管理科・リハビリテーション科・事務部とさまざまなスタッフで構成された糖尿病ケアチームは、参加者と一緒に歩きながら、リハビリや栄養などについての相談に答えていました。

参加者に応じて歩く距離などを相談、調整することで、全員が無理のない距離を楽しく、和気あいあいと歩くことができました。（済生記者　松元靖寿）

★今の季節の日中は動きやすく、紅葉がきれいになってくる頃なので気持ちがよさそうですね。（本部広報室　杉山菜央）

〈大分〉日田病院 骨折の連鎖を断つ！ 骨折リエゾンサービス

「大腿骨近位部骨折に対する骨折リエゾンサービス」（FLS）を昨年7月から開始しました。

FLSの目的は二次骨折の防止です。脆弱性骨折を起こした患者さんの骨粗鬆症治療開始率と治療継続率を上げ、リハビリテーションの視点から転倒予防を実践することで二次骨折を防ぎ、骨折の連鎖を断つことを目指しています。

【上】2人の骨粗鬆症マネージャー
【右】診察風景

現在、当院では骨粗鬆症マネージャーが2人在籍。医師や薬剤師、看護師、理学療法士など多職種協働でFLSに取り組んでいます。

併せて、地域のかかりつけ医や施設とICTを活用した連携を取り、継続した治療が行なえるシステムの構築を進めています。（主任理学療法士　久恒　健）

〈山形〉特養ながまち荘 刑務所のキャリア教育プログラムへ協力

10月13日、山形刑務所で行なわれたキャリア教育プログラムに筆者が協力雇用主として招かれ、受刑者と意見交換しました。

キャリア教育プログラムの目的は、受刑者が出所後に安定した就労生活を送るために受刑者自身の今後の課題に着眼させ、現実的な生活設計を考えるよう指導することにあります。

「チャンスを逃さず出所に向け準備をしたい」「罪を償い社会のために報いていきたい」「福祉の仕事にも興味が湧いた」など、受刑者から前向きな感想が多くありました。

出所後の生活設計の組み立てや改善更生のための一助になったならばと、改めて刑余者支援の意義を感じました。（施設長・全国済生会刑余者等支援推進協議会副会長　岩崎勝也）

〈福岡〉飯塚嘉穂病院 CF達成で生まれ変わった緩和ケアガーデン

3月22日～5月31日、緩和ケアガーデンのリニューアルを目的としたクラウドファンディングを実施し、無事達成することができました（4・7月号トピックス参照）。

大切な思い出がたくさん作れるような庭を目指し9月初旬に始まった改修工事は、10月末で無事終了。11月3日に開催した第4回済生会健康フェアで緩和ケアガーデンツアーを開催し、地域の方々にお披露目をしました。

ガーデンツアーでは「もしもの時はここで過ごしたい」といった声もあがり、緩和ケアのことを知らなかった人にも知っていただく機会となりました。

また、入院患者さんもご家族と過ごしたり、車椅子で散策をしたりと喜んでいただいています。

みなさんのご寄付で生まれ変わった庭を皆で大切にしていきます。（済生記者　松岡亜希）

topicS

〈神奈川〉横浜市南部病院
医療関係の仕事を目指す人が増えますように

11月1日、近隣の港南台第一中学校で同校2年生を対象とした「職業講話」が行なわれ、当院からも齋藤千穂小児科部長、河原崎純副看護部長、佐々木美理薬剤師が参加しました。

約50人の生徒さんを前に、3人は各自の業務内容、その職業を選んだ理由、日々の仕事の苦労などについて話しました。

授業後には「医療関係は社会的ニーズの高い仕事なので、就職先に困りにくいのはいいなと思った」などの感想も。

仕事について学ぶこうした機会を通じて、医療関係の仕事を目指す人が少しでも増えるとうれしいです。もしかすると将来、当院に就職して一緒に働くことがあるかも?

（地域医療連携室広報担当　小澤郁斗）

〈鳥取〉境港総合病院
消火競技会ペアの部で優勝

10月26日、境港市消防保安協会が主催する事業所対抗消火競技会が、境港消防署屋外訓練場で開催され、当院がペアの部で優勝しました。

同競技会は、防火意識の高揚と初期消火技術の向上が目的。今年は17チームが参加しました。

競技では各チーム2人で協力して消火用ホースを延ばし、バルブ操作により放水。火点標的を倒すまでの時間を競います。

当院は2チーム4人がペアの部に出場し、優勝したのは坂本佑太さん・鶴田亜珠さんのチームです。

参加者は「放水時に消火用ホースが水圧で持っていかれるようだった。慌てず手順を確実に進めることが大事だと実感しました」と話し、競技会への参加で消火栓バルブ操作、消火用ホースの扱いについてコツを得たようでした。

（済生記者　亀尾美子）

〈千葉〉習志野病院
院外で4年ぶりの新人研修

新入職員36人を対象としたリフレッシュ研修を11月10日、THE FARM（千葉県香取市）で開催しました。

午前中はさつまいも、水菜、聖護院大根などを収穫し、レザークラフト、キャンドル、ククサ作りなどのアクティビティを体験しました。

午後からはグループに分かれて「これまでの業務の振り返り」と「今後どんな職員になっていきたいか」というテーマでディスカッション。うれしかったこと、大変だったことなどを多職種で共有することができました。

研修後半は、1枚の新聞紙から作るタワービルディングに挑戦。1位が144センチという想定外の高さになったのには皆驚きました。

（総務課　佐藤昌明）

静岡済生会総合病院
高校生が届けてくれた災害時の備え

10月30日、県立駿河総合高校の2年生3人が、在宅医療機器を使用している患者さんやその家族を対象にした「災害時の備え」のポスターを届けるため、当院にやって来ました。

これは総合学習の一つ「減災・防災」の授業の一環として中部電力パワーグリッド株式会社のサポートのもと行なわれたもの。停電は在宅医療機器を使用している人にとって生命に関わる事態だと授業で学んだ彼らは、その人たちを救うにはどうしたらよいかを話し合い、必要な情報を伝えるポスターの配布を考えたそうです。

ポスターを受け取った松永靖事務部長は「停電が生命に関わる人がいることを知り、行動してくれたことがうれしい」と感心していました。

（済生記者　酒井あい）

〈山口〉豊浦病院
近隣支援学校と防災訓練

11月7日、天災発生時の迅速な対応と避難意識の向上を目的に、当院と併設のひびき保育園、隣接する豊浦総合支援学校が合同で防災訓練を実施。当院職員と園・学校の先生、生徒合わせて約50人が参加しました。

地震発生を知らせる放送後、看護師・事務職員が避難誘導。生徒はヘルメットを着用し、防災袋を背負って避難しました。避難が長時間に及ぶことを見据え、防災袋の中には1日分の着替えと定期券、それぞれがいつも持っている「落ち着きアイテム」等が入っています。避難後に引率教員や保育士は人員点呼・体調調査報告を、看護師は要配慮者への医療救護を実施しました。

学校の先生は「実際は余震や倒木の可能性もある。臨機応変に対応していきたい」と述べました。

（済生記者　西田千鶴）

topicS

〈和歌山〉有田病院
健康フェスタに165人

「第18回済生会有田医療福祉センター健康フェスタ」を10月22日に開催し、165人が来場しました。

当日は、医師・薬剤師・認定看護師などによる各種相談、骨密度・動脈硬化などの各種検査、身体測定、AEDやコグニバイクなどの体験コーナーを実施。当センターの伊藤秀一総長の特別講演「生命（いのち）輝く生活習慣術」、瀧藤克也院長の「フレイル予防～老後を楽しく過ごす為に～」、青石博文技監の「がんばろう有田の皆様」の講演のほか、地元高校のマンドリン演奏など盛りだくさんの内容となりました。

参加者は「毎年の開催を楽しみにしています」「講演を聞いて勉強になりました」といった感想を述べていました。

（済生記者　大向伸正）

〈新潟〉三条病院
手術室見学・医師体験ツアー

11月11日、4年ぶりの「手術室見学・医師体験ツアー」を開催し、小学生18人が参加しました。小学生が少しでも医療に興味を持ってもらえるように企画したものです。

本番さながらの雰囲気を味わってもらうため、手術着に着替えてからスタート。四つのグループに分かれ、ガウンの着脱・入念な手洗い、内視鏡の操作・超音波検査、電気メスを使った鶏肉の切開・腹腔鏡下での鉗子操作、人工歯の研磨を体験しました。

初めて触れる器具の操作に小学生たちは悪戦苦闘。しかし、医師やスタッフのお手本を見てからは徐々にコツをつかみ、器用に使いこなしていました。

終了後のアンケートには「医師を目指したくなった」という声もあり、忘れられない思い出となったようです。

（済生記者　丸山良樹）

〈神奈川〉東神奈川リハビリテーション病院
総勢23人で学会参加

9月9・10日の2日間、第21回日本神経理学療法学会学術大会がパシフィコ横浜で開催されました。

テーマは「臨床知へのあゆみ（Steps to Clinical Pearl）」。神経理学療法の進歩と学際性を示す多彩なプログラムが企画され、当院リハビリテーションセラピスト部からは座長3人、英語口述発表1人、口述発表1人、ポスター発表3人を含む総勢23人の理学療法士が参加しました。

発表に臨んだスタッフは多くの質問をいただき、活発な意見交換を経験することができました。座長の大役を担ったスタッフはフロア全体を取りしきり、とても頼もしく見えました。

ほかの参加者も、それぞれ興味のある講演や発表、シンポジウムに参加することで、最新の知見に触れることができました。

（理学療法士　篠田洋平）

RUN伴ふくしま　オレンジ色に染まる
〈福島〉川俣地域ケアセンター

認知症啓発イベント「RUN伴（とも）ふくしま2023」が9月16日に開催され、川俣病院・川俣光風園・なでしこ川俣、川俣地域包括支援センターの4事業所から計6チーム、総勢30人が参加しました。

当日はスタート場所の福島市役所に、47チームの参加者214人が集合。ゴールの川俣町役場までの37キロを笑顔で楽しくタスキをつなごう！と盛り上がりました。

参加者が書いた習字をメインロゴにしたオリジナルTシャツを身に着け、「RUN伴」のオレンジ色の横断幕を掲げながら、各チームが約2キロずつ走りました。

沿道で応援してくれるみなさんや、イベントの開催を知るみなさんに「認知症のことを考えていただくきっかけになるように」と思いを込めてタスキをつなぎました。

（川俣病院看護部長　佐藤典子）

〈愛媛〉松山乳児保育園
今年も「木」を磨きました

10月14日、1・2歳児クラスの2歳児20人とその保護者に、子どもたちが11月から遊びに使う「木（自然素材）」を保育士と一緒に磨いてもらいました。

お父さん、お母さんだけではなく、園児の兄弟も手伝って、みんなが安全に触れるよう角材の角や板の側面をやすりで削ります。

木は触ると温かみが感じられ、香りもよいので、子どもたちが大好きな素材です。長く並べたり、角材を積み上げたり、土や植物と組み合わせて家やパン屋さんなど、自分でイメージするものを自由に作ったりして遊ぶこともできます。

今年は「木」を使ってどんなおもしろい遊びが見られるのか、今から楽しみです。

（済生記者　別府絵里）

〈岩手〉特養百楽苑
百歳までも百歳からも

新型コロナに伴い延期していた敬老会を、10月22日にようやく開催することができました。感染拡大防止策も講じ、利用者さん1人にご家族は2人までとして、短時間での実施としました。

当日は利用者さん16人、ご家族14人が参加。今年度めでたく100歳を迎えた2人、白寿の2人、米寿の9人、上寿（100歳以上）の3人をお祝いしました。祝い状や記念品を受け取ったときの笑顔はいつにも増してうれしそうでした。

今年度は100歳以上の利用者さんが5人、来年度には7人となる予定です。施設名の通り「百歳までも百歳からも、楽（たの）しく過ごせる施設」を目指します。（済生記者　三上敦史）

〈鳥取〉境港総合病院
カニになりきって勉強会

11月1日、院内託児所なでしこルームで「カニ集会」を行ない、15人の子どもたちが参加しました。

「カニ集会」とは、カニの水揚げ量日本一を誇る境港市が、食育事業として市内の保育園、幼稚園で毎年実施しているベニズワイガニの勉強会です。

カニのお面をつけて、子どもたちは朝からワクワク。講師の先生も持参したカニのお面をかぶり、皆でカニかご漁や水揚げについて学んだ後、生きているカニを触る体験などをしました。

動いているカニを見るのが初めての子どもたちもいて、興味津々の様子。実際に漁で使うカニかごの中に入って楽しむなどの勉強会を満喫していました。

（済生記者　亀尾美子）

〈栃木〉宇都宮病院
救命救急センター長コロナを語る

宇都宮市医療・介護連携支援ステーション運営業務委託事業として9月30日、今年度1回目のネットワーク研修を当院みやのわホールで開催（Web同時配信）し、行政職員を含む多職種54人が参加しました。

当日は、救命救急センター長の小倉崇以医師が「重症コロナを語る」と題して講演。当院が経験したコロナ治療をはじめ、栃木県の救急搬送件数の現況、ACP、連携の重要性などについて報告しました。

講演後の質疑応答を含めた意見交換会では、「地域（行政）と病院の連携が課題であり、県として医療に力を入れる必要性を感じた」「誰かがやってくれるのではなく、その誰かになれるように、小さなことから声をあげていきたい」などの意見が続出。盛況のうちに研修会を終えました。

（地域連携課　秋山綾香）

〈滋賀〉守山市民病院
患者視点で院内ラウンド

10月23～27日の3日間、患者さんの満足度向上を目指すCS委員会の主催で、車椅子およびインスタント・シニア（高齢者疑似体験）による院内ラウンドを行ないました。

普段から掲示物の見回りなどは行なっていますが、疑似体験でのラウンドは新しい取り組み。医師や看護師、理学療法士、MSWなど多職種で構成される9人の委員が、正面玄関から

topicS

総合受付、診療科受付、採血（処置室）、検尿トイレなどを回り、車椅子の患者さんや高齢者の方の目線で動線や案内表示などをチェックしました。

「車椅子だと再来受付機や受付カウンターが高く感じる」「高齢だとあの案内表示の位置では気付きにくいかも」など、慣れ親しんだ院内も目線を変えることで多くの気付きがありました。

（済生記者　中嶋元香）

パパ、いつもありがとう
香川県済生会病院

9月12日に放送されたKSB瀬戸内海放送のニュース番組「News Park KSB」の「おしごとみせて」コーナーに、清水美雄外科医長が出演しました。

このコーナーは、子どもがお父さんやお母さんの働く姿を見て感謝を伝えるというもの。今回は清水外科医長が〝働くお父さん〟として密着取材を受けました。

8月2日の取材当日は、清水外科医長が済生丸で直島に行き健診を実施する様子や、病院に戻った後の手術・病棟回診・外来診療の様子を撮影。

後日、お父さんが働く姿をまとめた映像を見たお子さんから「パパだいすき」と書かれた手紙がプレゼントされました。

今回の取材は、別件の取材を受けた際に済生丸のことを話したことがきっかけとなりました。取材依頼の連絡をもらったときは非常にうれしく、広報の仕事にやりがいを感じました。

（済生記者　西山汐里）

〈山形〉特養ながまち荘
社会福祉功労者県知事表彰当荘から7人

10月30日、寒河江市市民文化会館で開催された「山形県民福祉大会」で、筆者を含む当荘の職員7人が社会福祉事業従事者として県知事表彰を受けました。

筆者は福祉の業務に携わり20数年経ち、現在は居宅ケアマネに従事しています。つらいこともありましたが、続けていくうちにやりがいや達成感へ変わりました。今ではこの仕事が自分の誇り、自信、自慢であり、まさに人生の一部であると感じています。

この年月を見守り成長させてくださった岩﨑勝也施設長をはじめ職員のみなさんに感謝しています。今後もさらにこの地域の福祉を築き上げていくために、これまでの経験を生かして貢献していきたいと思います。

（介護支援専門員　武田紀子）

topicS

〈山口〉豊浦病院
地元高校生140人に「命を救う」出前講座

県立下関北高校から依頼を受けて10月5日、BLS（一次救命処置）の健康出前講座を実施しました。

看護師7人と介護福祉士1人で同校を訪問。全校生徒と教員合わせて140人を対象に、「命を救う力」を身につけてもらうための講義・実践を行ないました。

スライドによる講義の後、六つのグループに分かれてBLSの一連の手順を体験。勇気を出して声を出し行動することの大切さを伝えました。

講座を終えて「命に関する授業は学校で習わないのでとてもためになった。助けられる命を救いたい」と生徒代表が挨拶。なお、この活動の取材記事は毎日新聞に掲載されました。

（済生記者　西田千鶴）

〈福岡〉大牟田病院
ハロウィーン仮装に思わずホッコリ

10月31日、当院併設の託児所の子どもたち6人が仮装して院内にやって来ました。

ハロウィーンの時期の恒例行事で、仮装した子どもたちは院長室訪問の後、院内数カ所を回ってお菓子をもらいます。

訪問者のかわいい仮装姿に、職員も患者さんも思わずホッコリ。

最初はワクワクと緊張が入り交じる表情だった子どもたちも、終わった後は安堵と達成感あふれる表情に。筆者自身、現在3歳の息子が1歳のときからこの託児所を利用していますが、こうした季節ごとのイベントも通して1年1年、たくましく成長していく姿を確認させてもらっています。

（リハビリテーション部副主任　小林一裕）

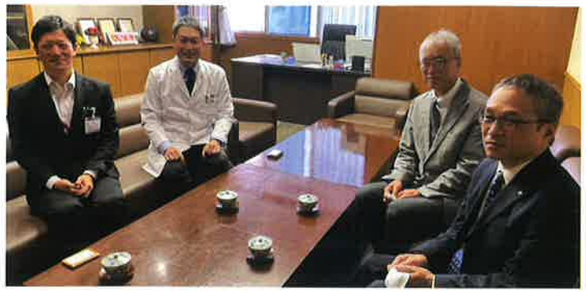
〈鳥取〉境港総合病院
有田病院が当院視察

10月13日、有田病院の瀧藤克也院長と塩貝計弥事務部長が、当院を訪れました。

病院の新築を検討中とのことで、当院の佐々木祐一郎院長と住田広明事務部長が当院の現況や今後の展望、新病院建設を決断した経緯などについて説明しました。

瀧藤院長の質問は細部に及び、会談は2時間を超えました。お二人にはその後、外来をはじめとした各病棟を視察していただきました。

（済生記者　亀尾美子）



©23 SANRIO　著作(株) サンリオ

キティちゃんが来てくれた
〈神奈川〉横浜市東部病院

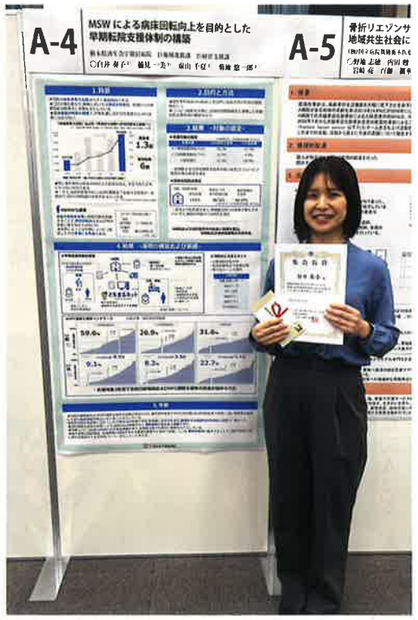
10月25日、当院小児病棟と併設の重症心身障害児（者）施設サルビアに、ハローキティが来てくれました。

これは株式会社サンリオの社会貢献活動の一つで、サンリオキャラクターが全国の病院や福祉施設、被災地などを訪問し、笑顔と思いやりの心を届けるというものです。

当日は、プレイルームで子どもたちや入所者さん、ご家族、スタッフと写真撮影をしたり、ベッドサイドへの訪問・撮影をしたりしてくれました。また、すてきなギフトもいただきました。

ハローキティの来訪で子どもたちや入所者さんだけでなく、医療従事者も皆笑顔になり、にぎやかで楽しい時間が過ごせました。（済生記者　荒木愛美）

〈栃木〉宇都宮病院
学会発表で大会特別賞



10月14日、とちぎ健康の森で開催された第22回日本医療マネジメント学会栃木支部学術集会で、当院地域連携課・白井奏子MSWの発表が大会特別賞を受賞しました。

演題は「MSWによる病床回転向上を目的とした早期転院支援体制の構築」。約140人に向け、当院が構築した回復期病院と連携した早期転院支援体制について、体制構築から運用までの流れ、運用後の劇的に改善した転院数の実績等を紹介しました。

白井MSWは「早期転院支援体制の構築が病床回転・地域からの受け入れ向上に寄与できた。また、後方連携は病院運営、地域医療の基盤を支える重要な要素であることを改めて認識した」と喜びを語りました。

（地域連携課　秋山綾香）

topicS

〈奈良〉訪問看護ステーション野の花
まつりを彩る手作りの薔薇

11月3日、大安寺西地区ふれあい秋まつりが奈良県立図書情報館広場で開催されました。

福祉・医療コーナーもあり、奈良病院のほかケアプランセンターすずらん、三笠包括支援センター、訪問看護ステーション野の花が参加。新人ナースによる血圧測定や健康相談、「花と剣の風船アート」のプレゼント、認知症見守り模擬訓練ツールを使ったかくれんぼスタンプラリーなどを行ないました。

野の花は訪問看護相談と薔薇のマグネットづくりのワークショップを実施。約50人が参加し、色とりどりの薔薇の花が咲きました。

大安寺西地区の地域住民が一丸となって、地域を元気にしたい！という熱い思いがひしひしと伝わってくる「秋まつり」でした。

（所長　丸山節子）

〈大阪〉野江特養城東園
待ってました！　新舞踊

コロナ禍で中止していた「三巳美会」による新舞踊ボランティアが、10月21日に再開しました。

新舞踊は、日舞を基本としながらもラインダンス等を取り入れたオリジナルの踊りで、民踊から歌謡曲まで幅広い振り付けがあります。

今回は総勢5人で来園。「ソーラン節」「高校三年生」など5曲と、アンコールで民踊の「河内音頭」「炭坑節」を入居者さん47人の前で披露していただきました。

入居者さんはこの日が来るのを大変楽しみにしており、三巳美会さんが姿を現した途端、大きな拍手が湧き起こりました。そして踊りが始まると、ここ数年のコロナ禍のうっぷんを晴らすかのように、手拍子をしたり、歌を口ずさんだり、一緒に踊り出したり、大いに盛り上がりました。

（事務長　川留章義）

〈滋賀〉栗東地域包括支援センター
在宅療養まるわかり講座

栗東市治田東学区の民生委員・児童委員協議会から依頼を受け、10月10日、「在宅療養まるわかり」の講座を当センターで開催しました。

この講座は、介護保険の申請からサービスの利用、最終的には自宅で最期を迎えるまでを物語風に構成したもの。介護が必要になった場合はどうすればよいのか、介護サービスにはどのような種類があるのかなど、具体例を出してわかりやすく説明しました。

自宅での看取りに関しても「未来ノート」（エンディングノート）の話を踏まえながら、在宅でも安心して最期が迎えられることを伝えました。

参加者は50人ほど。みなさん熱心にメモを取りながら聞いていました。

（介護支援専門員　永原　聡）

滋賀県済生会看護専門学校
笑顔咲き誇れ、なでしこ祭

11月3日、学生・職員合わせて117人が参加し、学校祭を開催しました。今年のテーマは「笑顔咲き誇れ　なでしこ祭！　～広げようコミュニケーションの輪～」。個人を認め合い、皆でつながることで笑顔が絶えない学校祭にしたいとの思いを込めました。

学校祭委員会が中心となって企画。「映えスポット」となった教室を巡り謎解きをする脱出ゲームや、患者さんの状態を報告するナーシング伝言ゲーム、看護の豆知識を取り入れたビンゴゲームなど、看護学生らしい工夫がいっぱいでした。

ゲームは1年生から3年生の混合チームで行ない、学年を超えた交流が実現。ゲームの合間には、学生が制作し、教員も協力出演した動画を鑑賞しました。同時開催したオープンキャンパスにも数人来ていただくことができました。

（済生記者　嶋口優子）

〈大阪〉中津病院
うめしばみのりの収穫祭で「まちのほけん室」

11月11・12日、当院がある大阪市北区の地域イベント「うめしばみのりの収穫祭」に参加しました。

同イベントは、木々に囲まれた都会の中のオアシスで、音楽・フード・ファッションなどを楽しむことがコンセプト。グランフロント大阪の目の前にある企業所有の空き地を中心に、ビルの軒先や地区内道路も使って開催されました。

当院からは看護師12人を中心に、助産師やソーシャルワーカーなど計22人が参加。「まちのほけん室」と書かれたのぼり旗を立て、血圧・血管年齢・骨密度・握力などの測定を実施したところ、幅広い年齢層の約170人が訪れました。

特に関心を集めたのは血管年齢測定。参加者からは「運動や食生活を見直す機会になりました」との声がありました。

（経営企画室長　中上哲也）

〈千葉〉習志野病院
フォローアップ研修で職種を越えた関係づくり

10月18日、今年度の新入職員に向けたフォローアップ研修を当院8階講堂で実施しました。

参加者48人がグループに分かれ、これまでの業務を振り返って成功体験、失敗事例、今後期待されることを個人ワークで抽出し、グループ内で共有。グループの総意を代表者が全体発表する場面では、緊張しながらも協力して取り組む姿が見られました。

新人からは医療現場における事例を扱った研修を希望する声もあり、研修内容をより実践的なものにするための今後の検討課題に加えられました。

同じ院内にいながらも、業務上では触れ合う機会がなかなかないものです。職種を越えた新人同士のつながりを大切にし、よりよい関係を築き上げることが、チーム医療につながると期待しています。

（総務課　佐藤昌明）

ジョギング＋ゴミ拾いで地域に貢献

熊本病院

10月21日、事務職員とその家族21人でプロギングを実施しました。

プロギングは、ジョギングをしながらゴミを拾う新しいフィットネス。新たな地域貢献の形としても注目を集めています。

今回は、走り自慢が集い疾走する「らんらんコース」、会話を楽しみながらの「てくてくコース」、小さな子どもたちと一緒の「とことこコース」の3コースに分かれて実施しました。

普段、通り慣れている自院の周辺ですが、意外とゴミが落ちていることに気がつきます。早朝8時から2時間をかけ、4グループ合計6・1キロのゴミが集まりました。

プロギングに参加してくれた子どもたちには、ドラキュラに扮した職員からお菓子のプレゼントがありました。

（済生記者　東　賢剛）

大量殺傷型テロ発生時の病院での対応を学ぶ

〈埼玉〉加須病院

10月14日に埼玉医大国際医療センターで行なわれた「MCLS大量殺傷型テロ対応病院コース」に当院の木村祐也医師、福島史人医師、看護師、ICU担当の薬剤師の4人が参加しました。

同研修は、大量殺傷型テロによる災害が発生した際に、医療機関がどのような点に注意して受け入れや準備をすべきかを理解し、傷病者の救命率・社会復帰率を向上させることを目的としています。座学では銃創や爆傷などの特徴やトリアージの方法を学び、近隣でテロが起こった場合を想定した机上演習を行ないました。

参加した木村医師は「テロ対応の際には5S（スペース、スタッフ、サプライ、システム、セキュリティ）を考える必要があると再認識した」と話しました。

（済生記者　蓬田絵里子）

中庭で地元高校生の演奏会

〈長野〉佐久市特養シルバーランドみついし

10月21日、市内の野沢北高等学校吹奏楽班の学生18人が来所し、当施設の中庭で演奏会を開いてくれました。

当日は、特養やショートステイ、デイサービスの利用者さんら約100人が1階のホールや2階のテラスに集まり、素敵な演奏に耳を傾けました。

曲目は「上を向いて歩こう」「津軽海峡冬景色」「北国の春」など、利用者さんに馴染みのあるものばかり。中には感動して「涙が止まらない」という人もいました。

演奏の合間に行なわれた寸劇も楽しく、生徒さんからたくさんの元気をいただきました。またぜひ来てほしいと思います。

（済生記者　大森　智）

地域に見守られて「七五三おめでとう！」

〈静岡〉川奈臨海学園

11月10日の大安の日、年長の男の子2人の七五三の行事を行ないました。

先輩にも手伝ってもらいながら担当職員が着付けを行ない、やんちゃな男の子たちはあっという間に立派な着物姿に。

施設長や職員から「かっこいいね！」「おめでとう！」とお祝いしてもらうと、にこにこ笑顔になりました。でも、カメラを向けた途端にスッとすまし顔で〝決めポーズ〟。そんな二人がとてもかわいらしく感じました。

トリック・オア・トリート！

〈埼玉〉川口総合病院

10月31日、川口乳児院で開かれたハロウィーンパーティーに、佐藤雅彦病院長がお菓子セットをたくさん持って遊びに行ってきました。

0・1歳児クラスの子どもたちは、魔法使いの帽子をかぶった佐藤病院長を見て大号泣！保育士さんに抱っこしてもらって一緒に「トリック・オア・トリート」を言い、お菓子が渡されるとすぐに笑顔になっていました。

2・3歳児クラスの子どもたちは、プリンセスや人気キャラクターなどの仮装が本格的！少し照れながらも一人ずつ、佐藤病院長にお菓子をもらいに来ていました。

ハロウィーンに参加したのは30人ほど。最初はドキドキしていた子どもたちも我々が帰る頃には、お菓子セットを抱えながら「バイバイ」と名残惜しそうに手を振ってくれました。

（済生記者　原　衣里奈）

その後は神社にお参りに行き、ご近所のみなさんにもお披露目して回りました。あたたかいお祝いの言葉をたくさんいただき、子どもたちが地域に見守られていることを改めて実感しました。

（保育士　山田琴音）

「みてみて！　とれた～！」カブの収穫

〈神奈川〉わかくさ保育園

10月11日、2歳児9人がプランターで育てたカブ（もものすけ）を収穫しました。

当園では食育の一環として、園庭の畑やプランターで野菜等を栽培しています。「はやくやりたい」「まだやらないの？」と朝からワクワクした様子の子どもたち。

小さな手に軍手をしてカブの葉を引っ張ると、絵本「おおきなカブ」のようにスポッと抜くことができ「みてみて、とれた～」と満面の笑みを浮かべました。

獲れたカブを給食で口にするや「なんかあまい」と言う子、べーっと出す子などさまざまでした。おうちに帰って家族に話したのか、翌日の連絡帳には貴重な体験ができたとの記載がたくさんありました。

（済生記者　本倉美穂）

topicS

全国済生会福祉施設長会
福祉施設長会「愛媛会議」4年ぶりの対面開催

10月19日、全国済生会福祉施設長会「愛媛会議」がANAクラウンプラザホテル松山で開催されました。

4年ぶりの対面開催となった今年度は松山特養が担当。愛媛県のゆるキャラ「みきゃん」「ダークみきゃん」に迎えられ、全国から43人の施設長が集まりました。

開会挨拶、本部報告に続いて、愛媛県保健福祉部長寿介護課の三好誠主幹が「介護保険を取り巻く愛媛の状況」をテーマに特別講演。総会・経営管理会議では、令和6年度介護報酬改定の見通しや、看護部長会・薬剤師会との連携について報告されました。また、介護人材不足に関して、〈神奈川〉特養わかくさの清水雅施設長が外国人労働者の受け入れ体制を話しました。

その後、六つの部会が開かれ、活発に情報交換・意見交換が行なわれました。対面での全体会議・懇親会の良さを改めて感じる一日となりました。

（松山特養　事務　夏井理恵）

〈兵庫〉特養ふじの里
大好きなお寿司を堪能

10月28日、西館の利用者さん50人が参加して食事会を開催しました。今年のメニューは、みなさんの大好きなお寿司、うどん、玉子焼きです。

玉子焼きは職員が腕を振るって作りました。少し焦げているところがあるのも手作りならでは。普段はあまり食事の進まない人が、手づかみで我先に食べようとしていたのには驚かされました。

うどんは各ユニットでおつゆを温めて器に盛っていきます。出汁（だし）の香りがすると「おいしそうな匂いがしてきた」と声が上がりました。お寿司も好きなネタを選んでもらい「こんなごちそう、うれしい」とたくさん食べていました。

普段はユニットで調理しないので、初めて見る光景に利用者さんは喜んでいました。職員も、普段見ることのない利用者さんの表情を見ることができました。

（西館ユニットリーダー　円口貴美子）

〈滋賀〉老健ケアポート栗東
顔を合わせて交流する意義を再確認

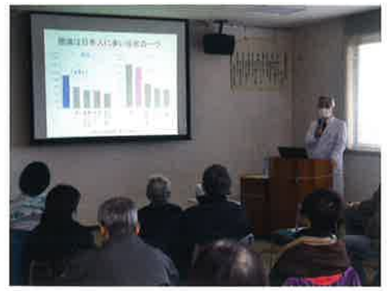
11月18日に家族会を開催し、寒空の中、14人のご家族が参加しました。家族同士の情報共有や支え合いを目的に年1回ほど行なっていましたが、コロナの影響で中断しており、3年ぶりの開催です。

はじめに、整形外科医である吉岡誠施設長は「明日から行える腰痛予防」を講話、続いてノーリフトケア委員会の委員は施設で行なっているノーリフトケアの紹介と、日常生活でできる腰痛予防の話をしました。

後半は利用サービスごとに分かれ、意見交換会を実施。それぞれがサービス利用に至った経緯や、日頃の困りごとなどについてざっくばらんに話しました。

人と交わることが制限されてきた期間を経て、改めて顔を合わせて交流することの意義を再確認。開催できたことへの感謝と感慨深さを噛（か）みしめました。

（リハビリテーション科課長　宮武　恵）



〈愛媛〉老人デイサービスセンター緑風荘
紅葉巡りでリフレッシュ

11月の紅葉シーズンを迎え、デイサービスの利用者さん延べ30人で4回にわたり近隣の紅葉スポット（小田深山渓谷、久万高原町・岩屋寺、砥部町広田）を巡りました。

どの日程も天候に恵まれ、紅葉を観ながら散策し記念撮影。色鮮やかな景色にみなさん「きれいやなー」と笑顔がこぼれていました。

「ちょうど見頃でよかったなあ」「外人さんもおいでたわい。オランダから来といでたんと」など帰り道の車内でも会話が弾んでいました。

自然の中に身を置き、心も体もリフレッシュ。限られた時間でしたが、楽しんでいただけたようでした。

（生活相談員　冨岡絵里）

愛知県済生会リハビリテーション病院
4病棟対抗での運動会

10月21日、病棟別運動会を開催しました。

1週間前からポスターを掲示したので、当日は会場がいっぱいになるほど参加者が集まり、にぎやかに。普段ユニホームの職員もこの日は皆ジャージに着替えて運動会気分は最高潮です。

玉入れ・輪投げ・大玉送り・風船バレーの4種目、4病棟対抗戦です。輪投げでは、普段車椅子にもたれかかっている患者さんが身を乗り出して輪を投げる姿に歓声が上がりました。

向かい合う患者さん同士が協力して往復のタイムを競う大玉送りは各病棟ともとても速く、1位と4位の差はわずか2秒と大接戦！

終了後、「昔を思い出しました。ありがとう」と涙する患者さんも。表彰状を抱きしめたり、すてきな笑顔あふれる患者さんの姿に、私たち職員もたくさんの元気をいただきました。

（リハビリテーション科長　北村哲也）

topicS

静岡医療福祉センター 成人部

演芸ボランティアが祭りに〝華〟

10月19日、外部から演芸ボランティア2組を招いて「あおば祭」開催しました。

1組目は静岡県立大学短期大学部による書道パフォーマンス。テレビで見るような書道パフォーマンスを生で見た利用者さんは、華麗で繊細な筆使いと前向きな言葉のメッセージに感動していました。

2組目は川原太鼓保存会の演奏。リズミカルでどこか懐かしい大小和太鼓や横笛の演奏を、みなさん真剣な眼差しで鑑賞し、最後に演奏体験もさせてもらいました。

本格的なパフォーマンスを楽しんだ約40人の利用者さんは「よかったね」「すごかったね」と口々に語っていました。

（済生記者　小林慈倫）

〈東京〉向島病院

院内で雑誌広告を撮影

当院では令和3年から院内の情報共有ツールとして「デスクネッツ ネオ」というグループウェアを使用しています。8月7日、その販売元・株式会社ネオ・ジャパンの雑誌広告撮影を当院で実施しました。

当日は広告イメージキャラクターでヴァイオリニストの松尾依里佳さんも来院。塚田信廣院長をはじめ看護師、コメディカル等が集合し、「多職種協働」を表現したイメージ写真を撮影しました。その後はシステム担当者に導入時のインタビューが行なわれました。

この広告は「AERA」11月6日号とJAL国内線の機内誌11月号に掲載されています。ネオ・ジャパンのウェブサイトにも事例紹介として掲載されていますので、ぜひご覧ください。

（済生記者　加藤建志）

〈大阪〉野江病院

病院のお仕事に興味津々！

10月26日、大阪市立すみれ小学校の2年生5人が、生活科の「町たんけん」の一環で当院に来てくれました。「町たんけん」は、地域で働く人にインタビューをして仕事内容やその人の仕事・地域への思いを知るという授業です。

「1日にどれくらいの患者さんが来ますか？」「何人ぐらいの人が働いていますか？」「どうしてこの病院で働こうと思ったのですか？」など、子どもたちは看護師や相談員に積極的に質問。

普段は見ることのできない薬剤科の見学も行ない、大きな機械や棚一面に並ぶ薬品に興味津々の様子でした。

しっかりメモをしたり写真を撮ったりと、子どもたちの一生懸命な姿に職員たちも思わず笑みがこぼれ、和やかなひとときを過ごすことができました。

（済生記者　坂本千晶）

100人で3世代交流会

〈長崎〉特養なでしこ荘

10月15日、毎年恒例の「第22回西山台小学校区三世代交流祭」が開催され、当施設から2人が参加しました。

総勢100人。前半は9班に分かれ、チーム対抗でグランドゴルフ大会と、全員参加の個人戦でホールインワン大会を実施しました。ホールインワンすると歓声が上がり、ガッツポーズで商品をゲットしていました。

後半は、長崎市消防局と地域の消防団の協力で、災害避難訓練としてAEDの使い方や消火訓練を行ないました。

また、消防車の乗車体験や消防服の着用体験は子どもたちには大人気で、お父さんとお母さんが一斉に写真を撮っていました。

（済生記者　川端　誠）

〈鳥取〉境港総合病院

職種の垣根を越えて地域医療を考える

10月20日、境港市多職種連携研修会が保健相談センター講堂で開かれました。

当院からは医師、看護師、ソーシャルワーカーなど10人が参加。総勢110人の地域医療・介護関係者が集い、会場は大変な熱気に包まれました。

当日は「つながる～今、私たちにできること」をテーマに多職種でのグループワークを実施。訪問先の経済困窮がみえるが介助者に聞きづらい、介護保険制度以外は不得手など、それぞれの悩みが次々にあがりました。筆者は地域包括ケア連携士として、制度の垣根を越えた総合相談窓口の設置を要望。適切な窓口や事業所へつなげるにはどうすればよいかを話し合いました。

（地域医療総合支援センター　ソーシャルワーカー　礒邉佳恵）

福井県済生会病院

100人規模の防火防災訓練

11月3日、防火防災訓練を実施しました。

訓練には約100人が参加。仮本部の設置から本部の立ち上げ、トリアージ訓練、トリアージと本部の連携、病院方針の決定などを重点的に行ないました。

終了後は病院スタッフで情報共有の機会を設け、訓練で得た知識や経験を振り返りました。

訓練に初めて参加した事務部総務・企画課の山村健太さんは「災害はいつ起こるかわからない。だからこそこういった訓練が重要だと思います」と話し、地域全体の危機管理への意識を新たにしていました。

この機会を通じて、コミュニケーションの向上や連携のさらなる強化が図られ、将来の災害に対する準備が一層進むと期待されます。

（済生記者　田中一弥）

〈山口〉豊浦病院

4年ぶり「まちの保健室」に300人

10月8・9日、リフレッシュパーク豊浦で開催された「第35回豊浦コスモスまつり」で「まちの保健室」を4年ぶりに出展しました。

当日は看護師による健康相談、血圧・血管年齢・体脂肪測定のほか、子ども向けの企画として手形スタンプや白衣写真撮影を実施しました。

子どもたちにはお菓子や風船、大人には健診推進のチラシやポケットティッシュを配布したところ、どのコーナーも大行列に。来場者は両日で約300人と盛況で、「血管年齢や体脂肪を測る機会がないのでうれしい」「このコーナーを楽しみにしていました」などの感想がありました。

（済生記者　西田千鶴）

〈福岡〉大牟田病院

南関町の健康を支えたい

10月25日、熊本県南関町の社会福祉協議会の依頼を受け、「南の関うから館」で健康教室を開催しました。

院外での健康教室の開催は新型コロナの影響で約3年ぶり。老人会会員や一般参加者含め約40人が参加しました。

南関町では農作業等で腰痛に悩む方が多いため、今回は「自宅でできる腰痛ケア」をテーマに講義と実技を行ないました。前半は腰痛のメカニズム、腰痛を引き起こしやすい姿勢や動作について解説し、後半は腰痛予防のストレッチなどを実践形式でレクチャー。

終了後、参加者から「これなら家でも続けられそう」などの感想がありました。

南関町は筆者の地元でもあり、地域医療に貢献したいという思いで理学療法士を目指しました。今回の健康教室が地域のみなさんの健康増進の一助になれば幸いです。

（リハビリテーション部副課長　石﨑仁弥）

〈静岡〉川奈臨海学園

パーラービーズ作り体験に長蛇の列

11月11日、4年ぶりに静岡済生会総合病院で開催された済生会フェアに参加しました。37カ所に及ぶ多彩な内容のブースが出展。1400人以上が来場し、大いに盛り上がりました。

当施設のブースでは、施設での取り組みとして病児保育事業・里親支援活動の紹介や、DWATの活動報告を掲示。

体験コーナーも設け、子どもたちに大人気のパーラービーズ作りを実施しました。開始時間の10時になると、3人の女の子が「待ってました！」と言わんばかりに受付を済ませ、体験を開始。

作業時間は一人15分ほどですが、難しい絵柄を選ぶと20～30分かかることも。そのため、受付を済ませた人の列がどんどん長くなり、受付終了の14時まで行列が途絶えることがありませんでした。概算で200人以上の来場があり、大盛況のうちに終了しました。

（里親支援専門相談員　鈴木志穂）

topicS

〈北海道〉小樽病院

本番さながら！模擬適時調査

10月25日、全国済生会事務（部）長会医療政策・医事研究部会の模擬適時調査を受けました。

事務部・看護部・医療技術部と医師以外のすべての職種（総勢30人）が参加。当日は本番さながらに、それぞれ自己紹介を済ませた後、三つのグループに分かれて調査を進めました。

最初は初対面ということもあり硬い雰囲気でしたが、そのうち調査員役の方々から「当院ではこうやっていますよ」「ここはこうした方がよいですよ」などのアドバイスが出始め、当院の担当者も積極的にアドバイスをもらおうと鋭い質問を繰り出すように。結果、予定の時間を大幅に超える調査となりました。

終了後の講評でたくさんの改善点を指摘されましたが、「小樽病院のみなさんは問題を自分ごととしてとらえているのが素晴らしい」とのお言葉もいただけました。

（済生記者　松尾覚志）

〈愛媛〉今治病院

医療福祉の多彩な企画で1300人が来場

10月29日、4年ぶりに「第2回済生会フェア」を当院と老健希望の園で開催し、約1300人が来場しました。

多くの家族連れが訪れ、体験・測定コーナー、お菓子釣り・輪投げなども大盛況。盲導犬訓練所のデモンストレーションでは多くの方々が盲導犬に癒やされていました。午後には当院医師による健康講座を実施しました。

今治第二病院からは豆つかみ体験や福祉用具の展示・疑似体験などができるブースを出展し、希望の園では認知症予防の脳トレ体験や車椅子を使ったゲームコーナーなどを設置。

今治 CATV YouTube ▼

外部からはユニクロ今治店が腕が上がりにくいなどの障害がある人のための衣料品の展示・販売を、今治警察署・消防本部が緊急車両との制服での記念撮影や煙体験を行ないました。

医療福祉施設ならではの多彩な企画に参加者は終始笑顔。今治CATVの取材も入りYouTubeで配信されています。

（用度課主任　木村美智子）

topicS

〈栃木〉うつのみやなでしこ保育園
新園庭でスポーツの秋

10月14日に運動会、20日にサッカー教室を開催しました。今年3月に増築工事を終えた新園庭でのイベントだけに、盛り上がりもひとしおです。

運動会には2～5歳児とその保護者133人が参加。かけっこ、正課体育発表、バルーン、リレーなどを行ないました。

サッカー教室には4・5歳児19人が参加。栃木SCアカデミーコーチの指導の下、サッカー（ボール遊び）を通して体を動かすことの楽しさ、うれしさ、面白さを体験しました。

ゴールが決まったときの満面の笑み。将来Jリーガーを目指すお友だちが出てくるかも？

保護者からの「走り回ってサッカーができるような広い園庭を作ってほしい」、保育士からの「運動会を自園でやりたい」という願いが見事に実現しました。

（保育園事務　福田　郁）

〈大阪〉野江病院
高橋薬剤部長が知事表彰 大阪府民の健康増進に寄与

10月26日、大阪府薬剤師会館で開催された薬事関係等功労者知事表彰式で、渡邉繁樹大阪府副知事が当院薬剤科の高橋一栄薬剤部長へ表彰状を授与しました。

大阪府では「薬と健康の週間」（毎年10月17日～23日）に合わせて、医薬品等の研究、生産や供給等に従事し、大阪府民の保健衛生の維持向上に寄与した功績が顕著な人に対して知事表彰を行なっています。今回は67人が表彰されました。

高橋薬剤部長は「この表彰は自分自身の取り組みだけでなく、一緒に働いている多くの仲間のおかげだと、心から感謝しています。これまで以上に身を引き締めて仕事に尽力していきます」と決意を新たにしていました。

（済生記者　坂本千晶）

済生会臨床検査研究会
4年ぶりの臨床検査技師長会

コロナ禍で3年ほど開催を見合わせていた「済生会臨床検査研究会・全国済生会技師長会関東ブロック会議」が、9月29日、静岡済生会総合病院で開催されました。

当日は、関東ブロックに所属する13病院の管理職19人が参加。ISO15189認定取得施設（4施設）からの状況報告、済生会施設間研修制度の実施に向けた対応、育児・介護休暇といった特別休暇取得の各病院の現状などについて、活発な意見交換が行なわれました。

会議終了後も、「Z世代　入社3年目までの若手育成」をテーマに、グループワークを交えた学術・教育講演会を実施。これからの若手育成方法について、各病院でも生かせる大変興味深い内容となりました。

（埼玉・川口総合病院　臨床検査科　絹田泰三）

愛知県青い鳥医療療育センター
4年ぶりの買い物会再開 自分で選ぶと楽しいね

10月から11月にかけて、買い物会を開催しました。コロナ禍前は全員が一堂に会して行なっていましたが、約4年ぶりの再開にあたって、棟ごとでの買い物会としました。

参加者は各棟、体調不良者を除くほぼ全員（30人）で、全棟合わせて150人ほど。会の名前も「わくわくマーケット」に改めました。

「いらっしゃいませ」「お菓子がいい」「おもちゃも見たい」――仮装して待ち受ける職員のもとへ、利用者さんたちがやってきました。みなさん、ワクワクした表情で、迷いながらも自分の買うものを決めていきます。

帰るときには「今度はいつやるの？」「また来年もやってね！」と満足そうな表情を浮かべていました。

（済生記者　田口幸子）

京都済生会病院
砂糖どれくらい摂ってる？

世界糖尿病デー（11月14日）にちなんで11月7～14日の8日間、「砂糖の量をみてみよう」と題した健康イベントを開催しました。また、糖尿病予防のシンボルマーク「ブルーサークル」をイメージし、長岡京らしい竹灯籠（とうろう）などを使ったブルーライトアップを行ないました。

健康イベントでは、お菓子やジュースに含まれる糖質の量をシュガースティックで可視化した展示や、食事に糖質がどれくらい含まれているかを当てるクイズなどを実施。また、江崎グリコ株式会社の協力で、アンケートに回答した人にはSUNAOシリーズの糖質オフクッキーをプレゼントしました。

期間中は361人が来訪。「砂糖の量を見たらお菓子が食べられなくなりそう」「食事メニューの参考になった」といった感想がありました。

（済生記者　白須優也）

熊本病院
子どもの事故防止セミナー

11月9日、0～2歳児を持つ当院の育休者向けに「子どもの事故防止セミナー」を院内で開催しました。

講師は当院救急医でITLS（病院搬入前の外傷処置教育訓練コース）日本支部小児委員会委員長、そして2児の母親でもある佐藤友子副部長です。

当日は10人が参加。誤飲・誤嚥予防を中心に、子どもの危険は日常に潜んでいること、発達に合わせたリスク管理の必要性、初期対応の重要性などのレクチャーを受けました。また、人形を使った実践的な誤飲の対処体験も行ない、参加者は事故の予防法と対処法を真剣に学んでいました。

12月には一般の親向けに院外でセミナーを開催する予定です。

（済生記者　東　賢剛）

topicS

〈石川〉金沢病院
4年ぶりの「ほっこりサロン」

緩和ケア病棟では9月27・28日、がんでご家族を亡くされたご遺族をお招きし、担当医師や看護師たちがグリーフケアを行なう遺族会「ほっこりサロン」を開催しました。

コロナ禍を経て4年ぶりの開催に、6人の参加者は「つらい思いを誰にも話すことができなかったが、そっと聞いてくださるみなさんがいてよかった」「同じ経験をしたご遺族や医療スタッフと思いを共有することで感情を表出することができて、気持ちがほぐれた」などと感想を述べていました。

故人のエピソードをご家族、スタッフで共有する場を設けることができ、互いのグリーフケアにつながるよい機会となりました。今後もコロナ前と同様サロンを継続していきたいと考えています。（済生記者　中川範彦）

〈埼玉〉川口総合病院
情報伝達をテーマに災害トリアージ訓練

災害トリアージ訓練を10月11日に行ない、当院職員72人、また傷病者役として川口看護専門学校の生徒ら59人が参加しました。

今回の訓練のテーマは「情報伝達」。各トリアージポスト、色別エリアの現場では、時系列活動記録を用いてリアルタイムで職員らに情報を共有、整理を行ないました。さらに各現場担当者は、災害対策本部へ現場の状況を迅速に伝えていました。

災害対策本部は、佐藤雅彦病院長や災害対策委員長の石戸保典外科主任部長など、全体の意思決定ができるメンバーで構成。各エリアの人の配置、応援要請などの指示、情報発信を行ない、全体がうまく連携するよう対応にあたりました。

訓練を無事に終え、佐藤病院長は「災害拠点病院として、万が一のときに迅速に対応できるようにしたい」と話しました。

（済生記者　原　衣里奈）

特養なでしこ香川
来年こそは入居者さんも交えて楽しめるように

10月29日、「第5回済生会フェア」を香川県済生会病院と共催し、約1000人が来場しました。

当施設では面会制限を継続しているため、1階のみを会場として開放。感染防止対策として飲食もテイクアウトのみとしました。

キッズコーナーには想定以上の来場者があり、用意していた景品が午前中になくなってしまい〝うれしい悲鳴〟をあげることに。

動物と触れ合えるコーナーでは、ヘビを首に巻く体験を実施。浄土明大施設長もしっかり巻いて金運アップを目論んでいました。

そのほか、当施設自慢の温泉が体験できる足湯コーナーや、プロのセラピストさんのハンドマッサージを受けられるアロマコーナーなど盛りだくさんの企画で地域の方々を迎えました。

来年こそは入居者さんも交えて、楽しいひとときを共有できればと思います。

（済生記者　住谷佳津）

香川県済生会病院
「済生会フェアが楽しみ！」地域の恒例イベントに

10月29日、当院と特養なでしこ香川が共同で第5回済生会フェアを開催し、「『輪』～地域とともに歩み　つながろうつなげよう～」をテーマに約1000人が来場しました。

院内ブースでは腹腔鏡で物を掴（つか）み移動させる体験や機械でお菓子を分包する薬剤師体験などを実施。駐車場ブースでは医師と看護師による心肺蘇生とAED体験を行ないました。

また、ステージでは健康講座として真柴賛副院長と吉武新悟整形外科部長が膝と肩関節をテーマに講演。そのほか、高松桜井高校吹奏楽部や高松桜井高校ダンス部が若さあふれる演奏やパフォーマンスで会場を盛り上げてくれました。

一般の方から「今年も済生会フェアはありますか」と問い合わせをいただくようになり、地域の恒例イベントとしての認知度が上がっていることを実感しています。

（済生記者　西山汐里）

〈栃木〉宇都宮乳児院
ハロウィーンパーティーで子どもたちの成長も実感

10月31日、院内でハロウィーンパーティーを行ないました。

この日は保育課長室・院長室もハロウィーン仕様に飾り付け、お菓子を用意して準備万端に。魔女や動物などに扮（ふん）して、お菓子をもらいに来た子どもたち23人を出迎えました。

1～2歳児の中には場所見知りでぐずってしまう子も。一方、3歳ともなると変身を楽しんでいるようで、笑顔ではしゃぐ様子が見られました。

荻津守院長が魔女の子に「頭にかわいいの付けてるね」と声をかけると、その子が「付いてるよ」と院長が頭に付けたツノを指さす微笑（ほほえ）ましい一幕も。

アルバム用の写真を撮影した後はハロウィーン特製ランチを楽しみ、お昼寝の後にはもらったお菓子を食べました。

愛らしい仮装姿だけでなく、月齢による成長過程も目にでき、とてもにぎやかな一日となりました。

（済生記者　大久保彰子）

〈滋賀〉特養淡海荘

4年ぶりのふれあい祭り

コロナ禍のため中止が続いていた「ふれあい祭り」を10月6日、4年ぶりに行ない、利用者さんら110人が参加しました。

当日は魚釣り（ぬいぐるみ）、輪投げ、射的、くじ引きなどのお楽しみを用意。昼食はお祭り仕様（行事食）にしました。

久しぶりのお祭りということもあり、射的では的をすべて倒すまで頑張る利用者さんも。倒したときは全員で万歳して盛り上がりました。また、抽選会で商品が当たったときに満面の笑顔で喜ぶ利用者さんにつられて、職員も楽しいひとときを過ごすことができました。

来年もまた笑顔あふれるお祭りができるように、今から準備を進めていきます。

（介護支援専門員・介護福祉士　宮下達也）

〈岩手〉北上済生会病院

市の子育てイベントに出展

9月9日、北上市保健・子育て支援複合施設ｈｏＫｋｏ（ほっこ）で開催された「北上こどもフェスタ」に、当院はこどもの応急手当教室を出展しました。

北上中の子育てに関するモノ・コトが大集合する同イベントは今回が初開催。出展のきっかけは、及川幸恵総看護師長の「パパママの子育ての不安に寄り添いたい」という声でした。

子どもの応急手当について実践を交えて説明し、質問や相談に応えたところ「とても勉強になった」「またやってほしい」などのうれしい声をいただきました。看護科お手製の応急手当ハンドブックも大好評。特にパパの関心の高さがうかがえました。

（済生記者　秋山みゆき）

〈広島〉呉病院

南海トラフ地震想定の防災訓練に救護班が参加

呉市総合防災訓練が10月30日に実施され、当院の医療救護班が参加しました。

この訓練は南海トラフ巨大地震が発生、市内でも震度6弱を観測し、津波警報が発表されたという想定で実施。医師・看護師・薬剤師など5人で構成する当院救護班は、近隣医療機関の救護班とともにトリアージエリアを担当しました。

次々と救護所へ運ばれてくる傷病者を、重症度をもとに振り分け。はじめは緊張している様子の当院救護班でしたが、回を重ねるごとにテキパキと迅速に対応していました。実戦さながらの訓練で、緊張感がひしひしと伝わってきました。

いつ発生するかわからない自然災害。冷静に対応するためには日ごろからの訓練を繰り返し続けることが大切であると実感しました。

（済生記者　植田　茜）

病院全体のワールドカフェに50人

広島病院

10月16日、看護部教育委員会・衛生委員会主催で「ワールドカフェ」を開催しました。

例年は看護部のみで行なっていましたが、今年度は病院全体の行事として実施。約50人の職員が参加しました。

テーマは「働きやすい職場とは?」。済生会で長く働くにはどうすればよいか、各グループに分かれ意見交換したところ、「マニュアルが整っている」「お給料がいい」「きれいな職場」「自分の思いや考えを言える、聞いてくれる同僚や上司がいる」など、さまざまな意見が出ました。

最後に、明日から自分ができることをカードに書き、自分の取り組みとして意識付けられるようにしました。

普段はあまり交流のないさまざまな職種の方と顔見知りになり、交流を深めることができました。

（総務課　居藤佳緒理）

〈大阪〉千里病院

初の地域交流イベント「白ダルマの恩返し」

10月28日、当院の創立20周年記念事業の締めくくりとなるイベント「白ダルマの恩返し」を開催しました。イベント名はクラウドファンディングの成功を祈願し、大願達成した白ダルマにちなみます。

当日はフットケアや認定看護師相談、体力測定、内視鏡手術などの体験コーナー、手指消毒チェック、ドクターカーでの記念撮影などの15ブースで、普段は見せることのない病院の裏側を知ってもらい、健康に関心を持ってもらえるプログラムを実施。

地域の方々との交流イベントは20周年の当院にして初の試みでしたが、「活気のある病院ですね」「次回も楽しみにしています」などのうれしい声をたくさんいただきました。

（済生記者　秋山みゆき）

〈福岡〉大牟田病院

SNSチーム発足

「当院を多くの方々に知っていただきたい」「愛される病院、選ばれる病院を目指したい」という思いから、当院では9月20日にＳＮＳチームを発足しました。

まずはさまざまなＳＮＳの中から、どれを活用するかを検討。「大切な人や大好きなことと、あなたを近づける」というミッションに共感し、インスタグラムでの発信を決めました。

診療やイベントの情報、時にはクスッとしたり、ほっこりしたりするような当院の日常をお届けすることで、社会とのつながりが強化されるよう努めていきます。

（ＳＮＳ委員会　看護師　古賀寛子）

topicS

ハロウィーンの訪問者 病院中が笑顔に

〈岩手〉北上済生会病院

10月といえば子どもが大好きなハロウィーン。10月31日、病院附属のなでしこ保育園に通う子どもたち約20人が、プリンセスやコウモリ、警察官など、それぞれが大好きなコスチュームで当院を訪れ、魔法使いに変身した一戸貞文院長と一緒に外来をパレードしました。

「トリック・オア・トリート！」「ハッピーハロウィーン！」院内は一気にハロウィーンの雰囲気に包まれ、診療を待っていた患者さんも職員も笑顔に。「今日来てよかった」「待ち時間が短く感じた」と、とても喜んでいただきました。

子どもたちにはハロウィーンを盛り上げてくれたお礼に、院長が絵本「ずーっとさいせいかい」やお菓子などを一人ずつ手渡しました。また来年も来てくださいね！

（済生記者　掛川千恵子）

内科医の救急蘇生講習会

兵庫県病院

10月21日、当院で初めてJMECCコース（日本内科学会救急コース）を開催しました。

JMECCコースは、内科医師を対象とした救急蘇生講習会です。心肺蘇生だけではなく、実際の臨床で遭遇する蘇生を必要とする前の段階にある内科救急症例への対応も含まれています。

当日は、明石市立市民病院副院長でコースディレクターの塚本正樹医師の指導のもと、近隣医療機関からの参加者も含むインストラクター7人、受講生6人が受講しました。

受講生は、午前中に日本救急医学会ICLSで設定された心停止症例への対応、午後に内科救急（非心停止症例）への対応を約1日かけて取得しました。

（総務課　白石航平）

職員向けのユニクロ試着会

〈東京〉中央病院

10月30日と11月1日、職員食堂奥の休憩スペースで職員対象のユニクロ試着会を開催しました。

当日は、院内店舗にはないアウターを中心に品ぞろえ。2日間で104人が来場し、昼食終わりにアウターの試着を楽しんでいました。

職員からユニクロへ「こういった商品がほしい」とのリクエストもありました。今後、医療施設内初のユニクロ店舗がある当院とのコラボ商品なども期待されます。

海老原全院長も来店し、黒のダウンジャケットを購入。「院長室で着ます」と笑顔でした。

（済生記者　鈴木香純）

台湾の看護師が見学に

〈東京〉向島病院

当院の先進的な医療と介護の取り組みを学ぶため、10月26日、台湾から18人の看護師が見学に訪れました。

これは、東京都看護協会が台北看護協会と結んでいる相互交流協定の一環で、都内の複数の病院を訪問し、各病院の特長や看護についての意見交換を行なうものです。

当院では、昨年から全病床に導入した「スマートベッドシステム」について、佐久間あゆみ看護部長が説明しました。実際にベッドに寝ていただく体験も組み込みました。

写真や動画の撮影、活発な意見交換が行なわれ、双方にとって大変学びのある交流の時間となりました。

（済生記者　加藤建志）

小さなおばけがやって来た！

〈大分〉日田病院

10月31日のハロウィーンの日、当院併設の託児所「なでしこ」から小さな5人のおばけたちがやって来ました。

仮装した子どもたちは意気揚々と託児所を出発し、ハロウィーン仕様のカートに乗って院内を巡りました。

「おかしちょうだい！」とおねだりをする可愛らしいおばけの姿に職員や患者さんたちは心を奪われ、思わず顔をほころばせていました。

中には、感動の涙を流す患者さんの姿も。子どもたちの可愛らしい姿をひと目見ようと、想定より多くの人が仕事の合間を縫って会いに来てくれました。

院内に笑顔と感動を届けてくれた小さなおばけたちは両手いっぱいのお菓子を抱え、満足気に託児所へと帰っていきました。

（総務課　南谷　華）

“うんちと健康”について高校で授業

〈福岡〉二日市病院

NPO法人博多ミツバチプロジェクトのメディカルパートナーでもある当院は、養蜂を通じた環境保護活動の一環で、県立大宰府高校で総合学習授業を実施しています。

10月31日、8回目の授業の講師として登壇したのは壁村哲平院長。28人の生徒を前に「ハチミツは健康にいいの？　腸内細菌について」というテーマで、“うんちと健康”についてレクチャーしました。途中でクイズや腸年齢の測定なども交え、生徒たちは興味深く聞いていました。

若い頃から腸内環境を整えるための食生活や生活習慣を気にする人は少ないかもしれませんが、この授業をきっかけに少しでも興味を持ってもらえれば幸いと考えます。

（済生記者　久冨大史）

社会福祉法人 SAISEIKAI YOKOHAMASHI TOBU HOSPITAL
恩賜財団 済生会横浜市東部病院

懸命に生きる、一人ひとりの小さな命を守り続けるために

クラウドファンディングにてご寄付を募集中！

いただくご寄付の使い道 ｜ NICUで使用している新生児集中治療人工呼吸器の購入

済生会横浜市東部病院へのご寄付は、税額控除適用法人へのご寄付となり税制優遇の対象になります。詳細はWEBサイト等をご覧ください。

寄付募集期間 開始 2023 11/9(木) 9:00 ｜ 終了 2024 1/31(水) 23:00

目標金額 2,000万円

赤ちゃんの命を支えるNICU。新生児用人工呼吸器の更新へのご寄付を

済生会横浜市東部病院は、地域周産期母子医療センターの1つとしてNICU（新生児特定集中治療室）6床を備えています。呼吸や循環状態がままならず、全身管理が必要な新生児の人工呼吸管理や輸液管理といった高度な治療を24時間体制で提供しており、赤ちゃんの命を守るために、地域で重要な役目を担っています。
しかしながら、開院から15年が経過した現在、さまざまな医療機器の更新が必要なタイミングを迎えています。新生児用の人工呼吸器も、次の15年に医療体制をつないでいくために買い替えが必要であり、このたびクラウドファンディングによる寄付募集を開始することとなりました。
助けられるはずの小さな命を守っていくために、どうかクラウドファンディングを通じて、皆さまのあたたかなご寄付をよろしくお願いいたします。

READYFOR

クラウドファンディングとは

インターネットを通して活動や夢を発信することで、想いに共感した人や活動を応援したいと思ってくれる人から資金を募る仕組み。All in というルールで、目標金額の達成の有無にかかわらずご寄付を受け取ります。

ご寄付・詳細は下記のサイトをご覧ください

https://readyfor.jp/projects/tobu-saiseikai

済生会横浜市東部病院 クラウドファンディング

topicS

いたずらされても許してしまいそう！

長崎病院

10月31日、当院併設の託児所でハロウィーンパーティーが行なわれ、15人の子どもたちのかわいい仮装姿で病院を訪問。今年はモンスターやイチゴさん、ゴーストや動物など託児所にある衣装の中から、好きな物を選んで仮装を楽しみました。

託児所でお菓子をもらった後は病院の管理棟へ。泣く子は1人もおらず、上手にお菓子を受け取って「トリック・オア・トリート！」の合言葉に負けないくらい元気な声で「ありがとう」も言えました。

3時のおやつでは手作りのハロウィーンゼリーを食べ大満足の子どもたち。総務課の協力のもと、0歳児から3歳児まで皆笑顔いっぱいの一日となりました。（託児所保育士　森橋夏波）

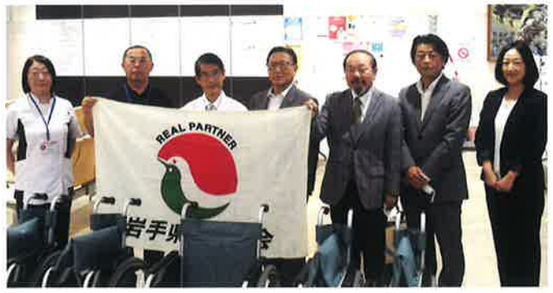
〈岩手〉北上済生会病院 県宅地建物取引業協会から車椅子5台の寄贈

県宅地建物取引業協会北上支部（伊澤哲雄支部長）から9月21日、車椅子5台の寄贈がありました。

「患者さまのために役立ててほしい。今後も市民の健康増進のために頑張ってください。期待しています」と、伊澤支部長は当院の一戸貞文院長へ思いを託されました。

北上支部は、豊かで暮らしやすい社会の実現に向けて地域貢献活動に積極的に取り組んでおり、当院への車椅子の寄贈は2年連続。

一戸院長は「期待に応えられるよう職員一丸となり取り組んでいきます。車椅子が必要な患者さんは多く、大切に使わせていただきます」と感謝を伝えました。（済生記者　掛川千恵子）



〈愛媛〉松山老健にぎたつ苑 〝森の中〟の新面会室で家族と久しぶりの対面

10月13日、当苑で一番長寿の104歳の利用者さんと娘さんが、家族面会室で久しぶりの対面を果たしました。

この面会室は、感染対策で利用者さんに外出を控えていただいている中、少しでも気分転換が図れるよう昨年改修を企画。1年かけて、今年5月に無事完成することができました。室内にいても自然の中で過ごしているような気持ちになれるよう、緑や森林をモチーフにした壁紙と自然光に近い照明を採用するなど、趣向を凝らしています。

わずか15分の面会時間でしたが、家族だけの空間でお互いの元気な姿を見ることができ、自然に笑顔がこぼれていました。

（介護支援専門員　前田　薫）

〈広島〉呉病院
地区ソフト大会で3位

呉地区病院事務長会が主催する第30回呉地区病院ソフトボール大会が、11月5日、呉市警固屋グラウンドで開催されました。最高気温24・1度という11月とは思えない暑さの中、8チームがトーナメント方式で戦いました。

呉病院チームは初戦に勝利しましたが、準決勝では惜しくも敗退。しかし3位決定戦で見事に勝利しました。本大会に向け重ねてきた練習の成果を発揮し、素晴らしい成績を収めることができました。

チームメンバーの親睦だけでなく、近隣病院とも連携・親睦を深めることができた大会となりました。

（済生記者　植田　茜）

〈山口〉豊浦病院
夜間想定の防災訓練

10月3日、夜間想定の防災訓練を院内で実施しました。

夜間帯に火災が発生した際に、限られた人員で円滑な非難行動ができることを目的として、約50人が参加。地元消防署をはじめ関連会社と連携し、通報、消火器による初期消火、初期消火失敗からの消火栓での消火、避難誘導など、実践的な訓練を行ないました。

訓練後、消防署の講評では「消防隊到着時にリーダーが誰かわからなかった」「火災報知器で出火場所を確認せずに初期消火に向かっていた」「出火部屋の退室時に扉が開けっ放しだった」などいくつかの問題点が指摘され、改善のための確認を行ないました。

（済生記者　西田千鶴）

〈広島〉老健はまな荘
自衛消防競技大会通算20回出場で表彰

10月5日、広島マリーナホップ駐車場で開催された第55回自衛消防競技大会の開会式で、当荘は通算20回出場の表彰を受けました。当日は勝田博文広島市消防局長から隅井浩治施設長に、表彰状が手渡されました。

職場の自衛消防隊による初期消火の技術を競うこの大会には、広島市と周辺市町の企業や病院、福祉施設等から132チーム、計300人が参加し、日頃の訓練の成果が披露されました。

当荘からは、昨年の結果に満足できず自ら今年の出場を熱望していた介護福祉士の平田友紀・升田翼ペアが出場。昨年のリベンジは果たせなかったものの、消火器男子の部56チーム中15位となり努力賞をいただきました。

きっと来年は3位以内に入賞してくれるものと期待しています。

（済生記者　佐藤　聡）

topicS

京都済生会病院
消防本部との交流会で症例検討「あの人は今？」

10月13日、乙訓（おとくに）消防組合消防本部との交流会を開催し、消防本部から約20人、当院からは吉田憲正院長をはじめ多職種約60人が参加しました。

交流会では「あの人は今？」と題し、実際に当院に搬送された3症例についての症例検討が行なわれました。救急隊は患者さんを病院に搬送するまでの経過報告。当院医師からは受け入れ後の診断・治療などを報告しました。

また、「どの医師にも質問しやすい雰囲気にしてほしい」など救急のリレーを円滑にするための意見も交わされました。

最後に、当院医師も参加して乙訓消防隊による救急活動訓練が披露されました。通報から救助活動、医師の指示による救急の特定行為の実施など、緊迫した様子の訓練に職員一同が圧倒されました。

（企画広報室長　松岡志穂）

〈福岡〉特養むさし苑
車椅子の寄贈に感謝

10月6日、福岡トヨペット様から車椅子1台の寄贈がありました。

身体的な制約のある高齢者が安心して生活を送れるようサポートを行なっている当苑にとって、車椅子は利用機会の多い大変重要な介護要具です。

田中俊太施設長は「当苑の入居者さんは、障害や病気などによりさまざまな介護を必要としています。歩行が不自由な方が車椅子を活用することで、活動の範囲が広がり、より自由な気持ちで苑内の生活を送ることができるのではないかと期待しています」と感謝の気持ちを述べました。

（済生記者　岸川涼二）

〈山形〉小白川ケアセンター
フェアを初開催「健康体験来てけろなあ～」

10月21日、「2023小白川ケアセンターフェア」を初開催しました。

当日は、1階フロアに健康相談やリハビリマシン体験などのコーナーを設置。子どもから高齢者まで参加することができる輪投げや的当てなどのコーナーもあり、にぎやかな声がフロアいっぱいに広がりました。

2階フロアでは、高校生による花笠踊りや太鼓の演奏も。音の迫力や力強さに驚いた人もおり、「すごい演奏で感動したね。来てよかった」などの声もありました。

来場者は、ショートステイ利用者、サ高住の住人、乳児院の子どもたちなど約160人に。みなさんに楽しんでもらえたことで職員も笑顔になりました。

（済生記者　岩城多香代）

topicS

CFによる第3カテーテル室、本格稼働！

〈大阪〉千里病院

創立20周年記念事業の一環で実施したクラウドファンディング〝「待った」のきかない命を守る　大阪府済生会千里病院の挑戦〟。目標金額の3000万円を大きく上回る成功により、第3カテーテル室が9月下旬に完成、11月1日から本格稼働しました。

新しいカテーテル室はアブレーションの治療をはじめ、心筋梗塞、脳梗塞などの緊急カテーテル治療や内視鏡手術でも使用可能で、今まで以上に患者さんをスムーズに受け入れることができるようになりました。

これからも「心のこもったチーム医療を行なう」という当院の理念のもと、地域医療の貢献により一層尽力します。

（済生記者　秋山みゆき）

新生児用人工呼吸器更新のCFに挑戦

〈神奈川〉横浜市東部病院

11月9日、新生児用人工呼吸器更新を目的としたクラウドファンディングを開始しました。

当院は、地域周産期母子医療センターの一つとしてNICU（新生児特定集中治療室）6床を備えています。NICUには26週以降の小さく生まれた赤ちゃんが入院しますが、肺の機能が未熟であるため、口から管を入れて人工呼吸器を装着し、赤ちゃんの呼吸を助ける必要があります。しかし、開院から16年が経ち、機器が更新の時期を迎えています。

今回のクラウドファンディングを通じて機器更新費用のご寄付を募るとともに、多くの人に当院の医療や役割を広く知ってもらう機会となること、さらに、共感しご寄付いただける方々と新たにつながる機会ともなることを目指しています。

詳細・ご寄付についてはP63の広告をご覧ください。

（済生記者　荒木愛美）

手作り感いっぱいの秋祭り

〈山形〉特養愛日荘

10月13日の午後、利用者さん40人・職員30人が参加して秋祭りを開催しました。感染症対策で夏祭りが延期となったので、今年初のお祭りです。

当日は、山形名物どんどん焼き、咀嚼や嚥下に配慮した玉こん風ゼリー、カップ焼き芋、チュロスなど、〝食欲の秋〟にちなんだ屋台が勢ぞろい。「どれもうまいね！　100点以上の点数です」とうれしそうに食べ物を頬張る利用者さんを見て、職員も準備した甲斐があったと喜んでいました。

また、射的コーナーや風船金魚つかみなどもあり、利用者さんは久々の縁日の雰囲気を楽しんだ様子。

手作り感あふれるお祭りとなりましたが、どこか懐かしい今回の催しは利用者さん・職員にとって、とてもうれしい日になったようです。

（済生記者　髙橋　睦）

秋祭りの様子▼

胃と腎臓をテーマに2日続けて市民公開講座

京都済生会病院

10月21・22日と2日続けて市民公開講座を行ない、両日合わせて約150人が来場しました。

21日は「知っておきたい胃のおはなし」をテーマに永守重信市民会館で開催。吉田憲正院長、大野智之消化器内科部長、宮川公治外科副部長が画像や動画を用いて解説しました。

22日は「一緒に考える慢性腎臓病」をテーマに当院なでしこホールで製薬会社と共催。第1部では長岡京市健康づくり推進課の杉原睦美課長が健診の取り組みを紹介し、原将之腎臓内科医長、塩濱奈保子主任管理栄養士が病気との付き合い方や食事について講演しました。第2部のパネルディスカッションでは、上野里紗腎臓内科医長の司会進行で慢性腎臓病に関するクイズを会場のみなさんと楽しみました。

（地域連携室係長　北野陽平）

肝臓をテーマに市民講座

福井県済生会病院

11月11日、肝疾患センター市民公開講座「どうする肝ぞう～今こそ考えよう！健康の秘訣～」を当院研修講堂で開催し、約110人が参加しました。

第1部は「肝がん診療最前線」などをテーマに講演。三重大学大学院医学系研究科消化器内科学教授の中川勇人先生の特別講演をはじめ、当院医師・看護師・検査技師・理学療法士が、最新情報や検査、肝臓に良い生活習慣について解説しました。

第2部は肝臓クイズ。事前に配付した「○」「×」の札を手に、全員参加で肝臓についての知識を深めました。

ほかにも、無料の肝脂肪量測定や血糖・握力測定、ハンドマッサージ、終演後には個別相談コーナーも設けられ、順番待ちの行列ができるほど好評でした。

（肝疾患センター　吉川千恵）

topicS

松山学園が71年の歴史に幕

〈愛媛〉松山特養

11月9日、少年院「松山学園」の閉庁式が行なわれ、山崎準平施設長が出席。本多浩太郎学園長から感謝状をいただきました。

同園は昭和28年に開設された愛媛県内唯一の少年院。今日まで約5800人が矯正教育を受けて退院しました。来年4月1日をもって、収容者の減少と施設の老朽化に伴う統廃合により71年の歴史に幕を閉じます。

松山特養は、少年たちの社会復帰に向けた社会貢献活動の場として、施設の庭木の手入れや清掃活動などの院外活動を長年受け入れてきました。

また、コロナ禍では在院者の作った野菜の寄贈などもいただきました。（事務　夏井理恵）

〈北海道〉小樽病院 在宅療養後方支援病院の役割等を連携懇談会で説明

9月15日付で在宅療養後方支援病院に指定されたことを受け、11月6日、在宅医療等を提供する連携医療機関の医師や連携担当者37人を招いて、地域医療連携懇談会を開催しました。

在宅療養後方支援病院とは、在宅療養中の患者さんやご家族が安心して療養生活を送れるよう、病状悪化などで緊急対応が必要になった際に入院する病院をあらかじめ決めておくことで、在宅医療を提供する診療所等の求めに応じて24時間いつでもスムーズに入院できる病院です。

当日は、医療支援室の阿畠亮室長がその役割や仕組みについて説明し、参加したみなさんから強い期待の声を多数いただきました。また、コロナ病棟として活用していた地域包括ケア病棟が、本来の機能を再開したことも報告しました。

（地域連携室　定　淳志）

〈岩手〉北上済生会病院 初の災害対応研修会に88人

済生会本部の災害対応研修・訓練の実施支援を活用して「災害対応研修会」を10月24日に開催し、88人が出席しました。

本研修会の開催は当院では初めて。参加者から「よく耳にするけどわからないことが多かったBCP（災害時における事業継続計画）について学べた」「定期的に学びの意識づけが必要だと感じた」などの声が上がり職員の意識の向上を感じました。今後は机上訓練を開催し、さらに学びを深めていこうと計画中です。

被害を想定して対策を立てるのはなかなか難しいことですが、とても重要です。今回の研修会は、受け入れ側となる当院の立ち位置を参加者全員で再認識するよい機会となりました。

（済生記者　掛川千恵子）

〈茨城〉水戸済生会総合病院 緩和ケア病棟でお月見会

10月27日、緩和ケア病棟でお月見会を開催し、患者さん13人とご家族3人が参加しました。

病棟スタッフ一同、ススキや月見だんごを持ち寄るなど心を込めて準備。当日は患者さんやご家族、病棟スタッフが集まり、心のつながりを感じるあたたかい時間を過ごすことができました。

「ススキを見ると家での十五夜を思い出して懐かしい」「家族で写真を撮れてうれしい」と、みなさん満足していただけたようです。

緩和ケア病棟では、病気による痛みや苦しみを軽減させる治療や身体的なケアと同時に、心のケアとしてさまざまな行事を企画しています。

（済生記者　今野正俊）

広島病院 ショッピングセンターのフェアに250人

隣接するショッピングセンターのフジグラン安芸と共催で11月5日、「済生会健康フェア」を開催しました。

健康・介護・医療費の各種相談、骨密度や心電図測定、リハビリ職員による体力測定のほか、子どもたちも楽しめる「なりきり白衣体験」「すべすべ軟膏を作ろう（薬剤師体験）」などを行ないました。

また、当院医師と管理栄養士による心不全に関する講演会、最後のビッグイベントとして坂中学校吹奏楽部の演奏会も実施。来場者数は延べ約250人と予想を上回り、大盛況のうちに幕を閉じました。

自分たちが地域に出て開催することの意義を実感させてくれる活動となりました。

（総務課　居藤佳緒理）

〈大阪〉健都健康管理センター 忙しい女性のためのマンモサンデーに11人

10月15日、当センターでマンモサンデーを開催し11人が受診しました。

「J・M・S（ジャパン・マンモグラフィー・サンデー）」とは、家事や仕事などで忙しく、平日に検診を受けにくい女性のために、毎年10月の第3日曜日は全国どこでも乳がん検診が受けられるようにしようという取り組み。全国の医療機関と認定NPO法人J・POSHが共同で行なっています。

今回はマンモグラフィー・乳腺超音波検査に加え、骨密度検査を実施。受診者からは「平日は仕事で忙しいので日曜日に検診を受けられるのはありがたい」「スムーズに検査が進むので毎年来ている」などの声がありました。

（済生記者　木村公美）

社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部
宮崎県済生会日向病院

「なにかあっても、この街には日向病院がある」

地域の安心を守るために、MRI装置の更新へ

目標金額 1000万円 2023年 11月 1日～12月25日 まで

＼済生会日向病院がクラウドファンディング挑戦中／

宮崎県北の医療の柱【MRI装置】を更新し、
地域医療の安定を守りたい

※本プロジェクトはAll in方式のため、目標金額の達成の有無にかかわらず実行者は寄附金を受け取ります。

日向病院は60年以上にわたり、日向入郷地域の住民の健康、医療に向き合い続けてきました。当院では種々の疾患の的確な診断と治療のためにMRI検査は必要不可欠なものであり、地域医療を支える当院としてなくてはなりません。

しかし現在当院のMRI装置は、故障時の修理部品供給が来年3月で終了となる危機的状況です。これからも地域住民の命と健康を守っていくには高額なMRI装置の買い替えが必要であり、クラウドファンディング実施を決意しました。これからも当院の理念である「患者さんのために、良質の医療を的確・迅速に、真心を込めて提供します」の実現に努めて参ります。温かいご寄附を、よろしくお願いいたします。

コース例 一部抜粋

【3000円コース｜MRIの更新を応援】
・寄附金領収証明書・お礼のメッセージ
・済生会日向病院のHPにてご芳名掲載（希望制）

【10,000円コース｜MRIの更新を応援】
・寄附金領収証明書・お礼のメッセージ
・済生会日向病院のHPにてご芳名掲載（希望制）

【100,000円コース｜MRIの更新を応援】
・寄附金領収証明書・お礼のメッセージ
・済生会日向病院のHPにてご芳名掲載（希望制）
・院内にてご芳名を掲示（中・希望制）

※寄附金領収証明書の日付は、READYFORから済生会日向病院に入金のある2024年2月の日付となります。このため、2024年の所得に対する確定申告の対象となりますので、ご注意ください。また、ギフト内容は変更となる場合がございます。

※各コース金額にシステム手数料（220円/税込）を追加した金額が合計の寄附金額となります。複数のコースを選択する場合も、お支払いごとに220円/税込となります。

インターネット上でのお手続きが難しい場合は、クラウドファンディング担当までご連絡ください。
EMAIL：cf@hyuga.saiseikai.or.jp　TEL：0982-63-1321
https://readyfor.jp/projects/saiseikaihyuga2023

READYFOR

MRI　済生会日向病院　レディーフォー

神奈川県病院

初めてのピニャータ

10月25日、地域包括ケア病棟で「ハロウィーン&ピニャータイベント」を開催し、入院患者さん約10人が参加しました。

メインイベントのピニャータはメキシコの伝統的な祝賀行事でよく見られ、カラフルな紙製の飾り箱を棒でたたき割ると、中から飴やお菓子が飛び出すというものです。今回はカボチャやお化けの提灯に紙吹雪を仕込み、順番にたたいてもらうと紙吹雪が舞うようにアレンジしました。

患者さんからは「とても盛り上がって楽しかった」「ピニャータは初めてで、いい思い出になった」との声がありました。

（済生記者　小山友輝）

山形済生病院

敷地外清掃に過去最多の参加者

11月10日の早朝、当院の職員で病院近くの県道沿いや隣接する河川の歩道の清掃を行ないました。2019年から社会貢献活動の一環として行なっているものです。

今回は看護師をはじめコメディカルスタッフ、事務職員など過去最多の70人近い職員が参加。五つのチームに分かれてごみ拾いを行ないました。

普段通勤などで通っている道も、時間をかけて歩いてみるとタバコの吸い殻やビニールごみ等が見つかります。きれいになった路面を見ると気持ちがよく、地域の環境美化について考える機会にもなりました。

（済生記者　柏倉汐里）

福井県済生会病院

ワイヤーアートの贈り物

11月10日に開催したメディカルカフェ（がんサロン）の参加者6人に、がんの治療を経験した人が手作りしたワイヤーアートがプレゼントされました。

クリスマスツリーの形のワイヤーアートには、制作者の温かい思いとともに、幸せになれるよう「笑顔のために祈りをこめて」とのメッセージが添えられていました。手作りの温もりが感じられるこのプレゼントは、がん患者とその家族にとって特別なものとなりました。

参加者の一人は「手作り特有の温かい気持ちが伝わってくる」とコメント。この言葉の通りメディカルカフェでのプレゼントは、がん患者さんたちの心のケアと支えになっています。

（済生記者　田中一弥）

topicS

オムツをテーマに地域交流の講習会

〈和歌山〉特養潮光園

10月26日、「正しいオムツの選び方・付け方講習会」を開催しました。昨年12月の新築移転からもうすぐ1年で、地域交流の一環として企画したものです。

講習会には15人が参加。「どうすれば経済的かつ身体にフィットした、漏れないオムツの付け方ができるのか」――大王製紙の柳瀬侑子講師を招いて専門的見地からの正しいオムツ交換の仕方を、約1時間半にわたりレクチャーしていただきました。「それは初めて知りました」という声が多く飛び交うほど熱心に耳を傾ける人が多く、浦崎弘之施設長は「オムツについて正しい選び方・付け方の重要性を学んだこと、併せて、オムツをテーマにみなさんとの地域交流ができたことも有意義でした」との挨拶で締めくくりました。

（事務責任者　山崎良彦）

吉川太鼓で秋祭り

〈兵庫〉特養ふじの里

10月15日、4年ぶりに吉川太鼓を迎えての秋祭りを開催し、およそ110人の入居者さんが参加しました。

太鼓の音を聞きながら、まるでアイドルにでも会ったかのように手を振り喜ぶ入居者さん。エアーで太鼓をたたく真似をする人も方もいっぱいいました。中には演奏に感動して泣き出す人も……。

盆踊りでは入居者さんと職員が輪になって一緒に踊ります。毎年恒例の「よさこい」では、周りで見守っている入居者さんが鳴子をカンカンと楽しそうに鳴らし、音楽をさらに盛り上げてくれました。

窓越しではありましたが、ご家族は久しぶりに入居者さんと顔を合わせ、一緒に写真も撮るなど、家族水入らずのひとときを過ごせたかと思います。

来年こそは家族も参加できる大々的な秋祭りを開催できることを願っています。

（東館介護士　齋藤元重）

「災害時は済生会に」自治体の防災訓練に参加

奈良病院

10月29日、近隣の大安寺西地区が主催する自主防災訓練が大安寺西小学校で開催され、ACLS（二次救命処置）の資格を持つ当院看護師3人が救命講習会を実施しました。

携帯の緊急メールが大きな音で鳴り響き、それを合図に住民が会場に続々と集合。本番さながらに訓練がスタートしました。プログラムは講習会のほか、避難所受付システムの試用や簡易担架の作成など興味を引く内容が盛りだくさんでした。当院担当の救命講習会にも約80人が参加しました。

参加者からは「これでいいの？　初めてAEDを触るんです」といった声も。いつ起こるかわからない災害に備える重要性を感じていただけたと実感しました。

「災害が起こったら済生会にみんな行くよ」――住民の一人から声をかけられ、身の引き締まる思いがしました。

（看護部病棟師長　大川千代）

育てた野菜はおいしいね

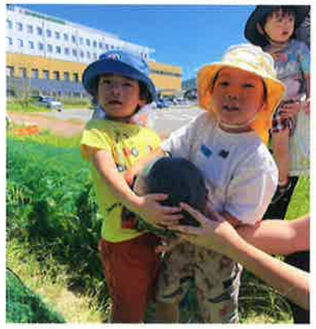
〈山口〉豊浦病院

当院併設のひびき保育園の園児による当院駐車場横の「とよさい農園」苗植え（2023年7月号参照）の結果報告です。

この夏、園児たちは暑い中、定期的に水やりに来てくれていたそうで、葉っぱに隠れたスイカを見つけ「あったー！」と元気に教えてくれたり、大きなスイカを抱えてみたりと興味津々。8月4日の収穫祭では、スイカのほかにも小ぶりなかわいいキャベツを収穫。スイカはその翌日のおやつの時間に食べました。

10月30日には、園児6人で芋掘りを実施しました。フサフサと育った芋のつるを引っ張ると、その先に大きなサツマイモがついているのに大興奮。その様子をほほえましく見ていた入院患者さんからハロウィーンのお菓子をもらい、さらに大喜びでした。

（経営企画室長　日髙滋規）



緩和ケアを考える一日

〈大阪〉中津病院

10月8～14日のホスピス緩和ケア週間に合わせ、10月13日、「緩和ケアとともに思いやりのある地域社会を創る」をテーマに掲げ、ホスピス・緩和ケア啓発普及イベントを開催しました。

当日は緩和ケアに関するリーフレット、まんが動画、がんに関する冊子の展示、ボランティアスタッフ作成のアロマサシェの配布、緩和ケアチームスタッフによるよろず相談を実施。

緩和ケアという言葉を見て「私にはまだ早い」という人、「当時、緩和ケアが受けられたらよかったのに」という人、「家族と一緒に今後のことをゆっくり話したいと思う」という人――さまざまな声が集まり、緩和ケアについて改めて考える一日となりました。

（がん診療支援センター事務局　浦田亜紀子）

topicS

大規模災害対応訓練に130人が参加

〈埼玉〉加須病院

10月28日、大規模災害対応訓練を実施しました。

「茨城県南部を中心とした地震により被害を生じた数時間後、東北自動車道で多重事故が起こり約120人の傷病者が発生。当院へ約60人の傷病者受け入れの要請があった」というシナリオで行なわれ、市役所や医師会、近隣病院DMAT、当院職員など総勢130人が参加。傷病者役として地元住民の市民サポーター約15人にもご協力いただきました。

今回は新築移転後初めての訓練として、災害時に医療体制をいかに早く立ち上げることができるかを目標に取り組みました。災害対策本部やトリアージエリアの設営・運用、多数傷病者受入・医療救護訓練など、実際に訓練を行なってみないとわからなかった課題も多く発見できました。

（済生記者　蓬田絵里子）

世界糖尿病デーに夜間糖尿病教室

〈愛媛〉松山病院

世界糖尿病デーの11月14日に、当院で4年ぶりの夜間糖尿病教室記念行事を行ない、16人が参加しました。

前半は、宮岡弘明院長が減塩の重要性について講義。さまざまなデータをもとに、病気の予防・改善につながる話をしました。また、石田美津子栄養科長が減塩方法の実践についてわかりやすく説明しました。

後半は「楽しく動脈硬化を学ぼう」というテーマで、当院スタッフによる劇団「なでしこ一座」が寸劇を公演。

病院の外壁や木に施したブルーライトアップも、夜間の記念行事を盛り上げてくれました。参加していた患者家族からの「きれいやね、こんなの見られてよかった」という言葉が印象的でした。

（済生記者　酒井千夏）

イベントと屋台メニューで気分をリフレッシュ

〈山形〉特養やまのべ荘

「やまのべ荘秋祭り」を9月27日に開催し、入居者さん・利用者さん約100人とともに、笑顔あふれるひとときを過ごしました。

感染対策を考慮し、各通り・ユニットごとに催し物を検討。花笠音頭や太鼓の演奏、ビンゴゲームや風船バレー、カラオケなど、大いに盛り上がりました。

屋台メニューも盛りだくさん。たこ焼き、焼き鳥、芋煮、稲庭うどん、チョコバナナなど、リクエストに応じて職員が腕を振るい、コロナ禍で落ち込んだ気分をリフレッシュ。秋の楽しい思い出づくりをすることができました。

今年は施設内での開催でしたが、来年こそは山形の秋の風物詩でもある芋煮をみなさんと一緒に作りながら、屋外でお祭りができることを祈っています。

（介護職員　伊藤真伍）

糖尿病は予防が大切

〈大阪〉中津病院

11月14日の世界糖尿病デーに合わせて、糖尿病啓発のイベントを開催しました。

当日は、病院正面玄関と噴水を糖尿病啓発のイメージカラーのブルーにライトアップ。そのほか、電子掲示板での世界糖尿病デーに関するスライドを掲示し、病院入口の吹き抜け部に垂れ幕を設置しました。

総合受付の周辺には、糖尿病の知識普及に向けたポスターを掲示。ブルーのバルーンなどで装飾し、より多くの人の目を引く工夫をしたところ「糖尿病は予防が大切なんですね。家族や友人にも伝えたいです」と患者さんから感想をいただきました。

こうしたイベントを通して糖尿病について考え、予防の第一歩を踏み出すきっかけになればと思います。

（看護師　五代あゆみ）

下関市消防局の救急隊と救急症例の検討会

〈山口〉豊浦病院

10月30日、当院大会議室で救急診療合同症例検討会を開催し、下関市消防局の救急隊と当院職員計60人が参加しました。テーマ別に7題の発表があり、現場での状況、処置や観察のポイント等について医師と救急隊員が意見を交わしました。

関門医療センター救急科ER24の松本泰幸先生にも参加いただき、各演題後に貴重な意見をいただきました。

マムシ咬傷の症例後の意見交換では「豊浦病院に着任してすぐ、患者さんに『はみ（方言でマムシ）に咬（か）まれた』と言われてわからなかった」といった医師のエピソードも。地域の言葉を知る必要性を感じました。

今後も地域の救急医療を守るため、救急隊との連携強化に努めていきます。

（済生記者　西田千鶴）

移動販売がやって来た！

〈兵庫〉サービス付き高齢者向け住宅ウエストサイド藤原台

6月から月2回、「移動販売K-DANK」の小山せりとさんのお店に来てもらっています。

出店場所は1階ロビー。早くも大人気で、出店日には開店を心待ちにする入居者さんや職員が集まります。食品や飲み物がたくさん並び、「あんた、なに買ったん？」「うわぁ、美味（おい）しそうやなぁ」とにぎわっています。

中には1日に2回も買いに来る入居者さんも。特に旬の野菜や果物はおすすめで、筆者もいつも季節の果物を購入しています。希望の物がない場合はリクエストをすれば、次の訪問の際に用意してもらえます。

コロナ禍で外出の機会や交流が少なくなっていた入居者さんの楽しみが増えました。

（管理部長心得　田中敬二）

〈大阪〉中津病院
大自然の中で1泊2日の管理職研修

10月20・21日の2日間、大阪最北端の能勢町で合宿研修「みらいキャンプ・in能勢」を実施し、課長クラスの職員10人が参加しました。

この研修は、グループワークに重点を置いたプログラムが中心。レゴブロックの形を記憶だけで再現するグループ対抗のパズルゲームや、管理職・リーダーなどの監督者が職場の人間関係を円滑にし、問題を未然に予防・解決するための技法「TWI-JR」を習得する演習などを行ないました。

宿泊先は古民家を再生した民泊施設で、五右衛門風呂も体験。都会の喧騒から離れた大自然の中で有意義な研修となりました。

（事務部人事室　上田健一）

〈山形〉特養愛日荘
職員の力作展示 健康相談コーナーも

10月29日、東沢まつり・文化祭が東沢コミュニティセンターで行なわれ、当施設は利用者・職員の作品展示と、済生会愛らんど地域包括支援センターによる健康相談コーナーで参加しました。

当日は余暇活動や俳句クラブで作った作品、9月のかみのやま温泉全国かかし祭りに出展したかかしなど計50点を展示。並べて見るとなかなかの出来栄えです。

健康相談コーナーでは血管年齢・血圧等の測定を実施。訪れた約70人に健康状態を知ることの大切さを伝えました。血管年齢に関心を持つ人が多く、実年齢より若い測定結果を見てうれしそうな人も。

子ども神輿も行なわれ、見に来た利用者は「わっしょい！わっしょい！」と笑顔で楽しんでいました。

（済生記者　髙橋　睦）

〈神奈川〉横浜市東部病院
4年ぶりの連携登録医の会 過去最多の医師参加

11月9日、横浜ロイヤルパークホテルで「済生会横浜市東部病院第7回連携登録医の会」を4年ぶりに開催しました。

この規模の集合開催は久しぶりということで、当日は158の医療機関から総勢228人（うち医師173人＝過去最多）に参加いただきました。

コロナ禍でもオンラインなどを駆使しながら変わらない連携を模索してきましたが、やはり「顔の見える連携」はよく、みなさん話が尽きない様子でした。

これからも連携登録医療機関のみなさんと協力していきながら、良質な医療を提供し続けていきます。

（済生記者　荒木愛美）

〈大分〉日田病院
インスタグラム始めました！

11月6日、リクルートやブランド向上を目的として当院のインスタグラムを開設しました。

当院の取り組みや活動報告、日田市のことや職員の日常など、ソーシャルメディアポリシーに基づいて投稿していきます。

また、多くの職員に広報活動に参加してもらおうと、全職員から投稿を募集。「いいね！」の数が多い投稿を「ベストいいね」賞として表彰するコンテストを毎月開催します。

SAISEIKAIHITA

記事募集を開始すると早速応募があり、職員の熱い思いを改めて感じることができました。

たくさんの方々に当院の魅力を発信できるよう、頑張っていきます。みなさんのフォローをお待ちしています！

（済生記者　石井　玲）

〈大阪〉吹田病院
地域の垣根を越えて在宅を「ともに」考える

10月25日、第2回在宅をともに考える会を開催し、当院職員・地域の医療従事者60人が参加しました。

今回は「ともにSTUDY」と題し、当院の岡部祥子認知症看護認定看護師の「認知症の理解と関わり方」のレクチャーに続き、30分ほどのグループワークを行ないました。

テーマは「地域で生活を維持するための支援を考えよう」。認知症の人への関わりや困難なケースなどについて意見交換し、自分だけが困っているのではなく、皆が同じように悩みながら関わっていることを改めて共有できました。

岡部認定看護師からの「一問一答はない」という言葉に安心したという所感もありました。

今年度はあと2回「ともにシリーズ」を開催予定です。

（ホームケア支援課主任　加藤尚子）

〈山形〉養護（盲）老人ホーム山静寿
充実のハロウィーン女子会

10月19日、当施設の手芸クラブのメンバーで「ハロウィーン女子会」を行ないました。

手芸クラブは、毎週木曜日に入所者4人、職員1人で活動。共通のテーマを決めて作品づくりに取り組んでいます。

10月の活動は「ハロウィーン女子会」。ハロウィーンに向けて各自が作成したカボチャの手芸作品をテーブルに並べ、それぞれの作品への思いや、今後の作品づくりのアイデアについて語り合いました。女子会らしく手芸以外のおしゃべりにも花が咲き、充実した時間を過ごせたようです。

メンバーからは「頑張って作りました」「いっぱい写真撮っていってください」との言葉も。作品づくりに手ごたえを感じている様子でした。

（済生記者　丹　秀樹）

社会福祉法人 恩賜財団 済生会
龍ケ崎済生会病院

より安心して出産を迎えられる快適な空間を提供したい

目標金額1,000万円 2023年12月4日から2024年1月31日まで

＼龍ケ崎済生会病院がクラウドファンディング挑戦中／

龍ケ崎済生会｜安心であたたかなお産のため産科病棟に快適な空間を！

※本プロジェクトはAll or Nothing方式のため、募集終了日までに目標金額に到達しなかった場合、いただいたご寄付は返金いたします。

龍ケ崎済生会病院は、22診療科を有する地域の中核的な機能を持った「地域医療支援病院」です。龍ケ崎市内では出産ができる唯一の施設（2023年11月時点）として妊娠から出産、産後、その後の小児科での対応まで一気通貫した体制を持つ病院です。

しかしながら、開院から20年以上経ち、施設面での老朽化が目立ってまいりました。また、龍ケ崎市をはじめ近隣地域の出産件数も減少傾向にある現状を受け、“妊婦さんやそのご家族に選んでいただけるような、もっと安心して出産できる快適な環境にできないだろうか”と考えました。

そこでこの度、済生会本部からクラウドファンディング挑戦への応援もあって「LDR室」の導入に向けたクラウドファンディングに挑戦することを決めました。
LDRとは「Labor（陣痛）・Delivery（分娩）・Recovery（回復）」の頭文字を取ったものです。陣痛から分娩、産後の回復までを同じ部屋で、安心できる人（家族）と過ごせるため、より安心して出産に臨むことができます。

地域の中核病院として、出産やその後の健康を支えながら、地域の皆さまとともに笑顔と活気があふれるまちを目指していきたいと考えています。
ご賛同いただける皆さまからのご寄付をどうぞよろしくお願いいたします。

READYFOR　龍ケ崎済生会病院　レディーフォー

インターネット上でのお手続きが難しい場合は、龍ケ崎済生会病院 クラウドファンディング担当者まで直接ご連絡ください。EMAIL：crowdfunding@ryugasaki-hp.org　TEL：0297-63-7111(代)
https://readyfor.jp/projects/ryugasaki-saiseikai

topicS

〈長野〉佐久市特養 シルバーランドみついで打ちたてのそばを楽しむ

当施設がある長野県佐久地域の新そば収穫の時期を迎え、11月8日、恒例の「そば打ち」を開催しました。

当日は職人さんを招き、入居者さん33人の前でプロのそば打ちを披露していただきました。

入居者さんの中にはそば打ち経験者も。「懐かしいなぁ」「水加減が難しいんだよ」などと言いながら、職人さんの見事な手さばきを見ていました。

昼食は、打ちたてのそばを使った天ぷらそば。今年もみなさんで季節感を楽しみ、味わっていただくことができました。

（済生記者　大森　智）

〈岡山〉特養みなみがた荘 社会福祉優良従事者に介護職員の工藤さん表彰

当施設の介護職員・工藤富美恵さんが、9月19日、山陽新聞社会事業団より岡山県社会福祉優良従事者として表彰されました。

長年の地域福祉向上への貢献に加え、済生会DCATでの熊本地震時の障害者施設支援、岡山県DWATでの西日本豪雨災害時の避難住民支援といった災害支援活動が認められました。

工藤さんからは「施設のみなさんの協力のおかげで受賞できました。ありがとうございます」と喜びの声が寄せられました。

（施設長　高中和明）

〈福岡〉大牟田病院 障害者支援施設のまつりで青空健康チェック

10月21日に障害者支援施設大牟田恵愛園で開催された「第37回恵愛まつり」に参加し、青空健康チェックを実施しました。

当日は14人のスタッフが参加。血圧・骨密度・血管年齢測定、体組成分分析、乳がん触診体験、手洗い体験、栄養・お薬相談を行ないました。

季節に合わせてブースをハロウィーン仕様に飾り付けし、堅苦しさがないよう工夫しました。気軽に測定・体験ができるとあって、約80人がブースを来訪し、待ち時間も出るほど大盛況でした。

また、参加者には消毒ジェル・絆創膏・ポケットティッシュ、お菓子やジュースを配布。特に子どもたちに大好評でした。

（地域医療連携室長　浦　正太）

topicS

運動会で五感を刺激　4年ぶりに再開

岡山療護センター

コロナ禍で中止していた運動会を10月26日、4年ぶりに開催しました。自動車事故による受傷前には四季折々に参加していたであろうイベントを企画し、五感を刺激しました。

患者さん40人、職員50人が参加。4チームに分かれ、赤・青・黄・緑のハチマキを巻き、手には色別のうちわを持ち、車椅子で入場。ラジオ体操、玉入れを行ないました。

玉入れはランドリーバックをカゴに見立て、ジャンボお手玉を投げられる人は投げ入れ、腕が上がらない人はうちわに球を乗せて入れます。

30分ほどの運動会でしたが、最後には全員が風船を持ち、空に飛ばすバルンリリースを行ない閉会。青空高く色とりどりの風船が飛び、歓声と笑顔と拍手であふれました。

（総看護師長　山田由紀子）

〈石川〉こども園アイリス

輝く園児たちに大きな拍手

9月30日、近隣の明成小学校のグラウンドで、当園の運動会を開催しました。コロナが落ち着いてきたこともあり、5年ぶりに0～5歳児クラスの園児74人とその保護者、総勢250人の参加となりました。

当日は雲一つない快晴で、絶好の運動会日和。園児たちが踊る様子を「かわいい～」と手拍子を送ったり、保護者競技の紅白玉入れやパン取り競争を精いっぱい応援したりと皆で盛り上がりました。

5歳児クラスの園児たちによる「スタンツ」では、皆がドキドキしながら見守る中、堂々と演技をやり遂げました。大技のムカデやピラミッドが決まり、他クラスの保護者からも感嘆の声が。大きな拍手が沸き起こっていました。

「ありがとうございました」と最後に礼をした5歳児たちの表情は、とても輝いていました。

（済生記者　小寺　唯）

〈茨城〉水戸済生会総合病院

多職種が参加して模擬適時調査に挑む

9月22日、全国済生会事務（部）長会医療政策・医事研究部会ワーキングチーム「WT-1B」のメンバーが、模擬適時調査の調査官として来院しました。

当院は平成30年以来厚生局の適時調査がないため、初めての経験となる職員も多く、事前準備も悪戦苦闘の連続でした。

当日は多職種の職員20人以上が参加。書類の確認、ヒアリング、院内ラウンド、講評と本番さながらに行なわれました。

調査後はその結果を院内で共有し、多職種で協力して指摘事項についての運用・管理の見直しを行なっています。

時間の経過とともに運用・管理が行き届かない部分が生じてしまうこともあり、今回の適時調査は大切な気付きを得るとても有意義な経験となりました。

（医事一課　江沼健一）

〈大阪〉野江特養城東園

生け花や手作り作品展示　華やかな雰囲気に

11月1日から7日まで、特養とデイサービス合同で、恒例の「城東園文化展」を開催しました。

展示物は、華道クラブの入居者さんによる生け花や、レクリエーションで作成した塗り絵や貼り絵、鯉の工作、習字など。

自分自身の作品を車椅子から立ち上がってうれしそうに見る人、照れながらもどこか誇らしげな人。この1週間、1階フロアは華やかな雰囲気に包まれました。

今回初めて、職員の手作りスタンドや花のアレンジメントを展示しました。利用者さんの中には、感心するだけでなく「来年は私も！」と意気込む人も。

個々の制作意欲を高めることは特養の本来の目的である「自立支援」の一助になると、改めて文化展の開催意義を実感しました。

（係長　佃　一博）

〈茨城〉神栖済生会病院・訪問看護ステーションかみす

病院と市民で共創するオータムフェスタ

10月28日、「オータムフェスタ2023」を神栖済生会病院敷地内で開催しました。

会場にはAED体験やロコモ診断、栄養クイズなどに加え、地域のボランティアによるハーブティー試飲や入浴剤作りなど、さまざまな体験・展示ブースを設置。大勢の来場者でにぎわいました。

また、書道パフォーマンスやキッズチアダンス、歌と楽器の演奏などの熱演には、観客から大きな拍手が。市民公開講座は立ち見が出るほど盛況で、聴講者は皆、真剣に聴き入っていました。

訪問看護ステーションかみすのスタッフは看護相談を実施。市民と交流する有意義な時間を過ごすことができました。

初開催でしたが、来場者アンケートでは「病院との関係が近くなった」「福祉事業所の出店があり地域医療との連携が感じられた」など、多くの好意的な声がありました。

（済生記者　江口裕紀・松崎千恵子）

topicS

〈石川〉こども園アイリス
こぼこぼでおいしいお芋

10月11日、3～5歳児クラスの41人で、加賀野菜の「五郎島金時芋」を堀りに出かけました。

事前にサツマイモの図鑑や絵本、紙芝居を楽しんでいたので、早く本物を掘りたくて皆ウズウズ。移動のバスの中でも、「こーんなに大きいのがあったらどうする!?」「持って帰れないからそこで食べよう!」と子ども同士の会話が聞こえてきました。

芋掘りが始まり、サツマイモの頭が土の中から見えると皆大興奮！　汚れるのもかまわず掘り、「自分が掘ったんだよ」とお芋を誇らしげに見せてくれました。

掘ってきたお芋は後日、園庭で焼き芋に。園児たちは「こぼこぼ（金沢弁。ほくほくとしたという意味）でおいしい」と頬張っていました。

（済生記者　小寺　唯）

〈東京〉中央病院
地域住民も見学参加
港区災害医療合同訓練

11月6日、港区災害医療合同訓練及び院内防災訓練を実施しました。港区三師会（医師会・歯科医師会・薬剤師会）から11人、病院職員142人が参加。今回初めて、町内会防災担当の役員をしている住民8人、済生会本部2人の見学参加がありました。

今回は震度6弱の大規模地震を想定。病院の初動と傷病者受け入れのシミュレーションを行なうことが目的です。

当日、災害対策本部長を務める海老原全院長のもと、1階会計受付前に災害本部を設置。情報収集や院内の診療体制の構築を行ないました。

新型コロナ流行後初の訓練で、感染症対策も同時に行なう必要があり、さまざまな課題も浮かび上がりましたが、災害に備えて意識の向上を図る有意義な訓練となりました。

（済生記者　鈴木香純）

〈広島〉特養たかね荘こやうら
地元小学生と
防災カルタで交流

10月10日、地元の坂町立小屋浦小学校の5年生児童18人を施設に招き、利用者さん20人参加のもとで交流会を開きました。

交流会では児童たちとカルタ取りをして楽しみました。使用したのは、子どもたち手作りの「防災カルタ」。5年前の西日本豪雨災害でこの小屋浦地区には甚大な被害が発生し、その経験を踏まえて作成したそうで、防災意識を高めるのに役立てているとのこと。

カルタ取りで遊んだ後、児童たちからこの防災カルタと歌をプレゼントしていただき、閉会となりました。久しぶりに聞く子どもたちの元気な笑い声や歌声に涙して喜ぶ利用者さんもいて、とても有意義な時間となりました。

（済生記者　坂本洋司）

〈山形〉はやぶさ保育園
待ちに待った
ハロウィーンパーティー

10月31日、毎年恒例のハロウィーンパーティーを開催しました。

子どもたちが待ちに待ったこの日、0～2歳児は一人ひとり製作したお面やマントを身に付けて参加。3～5歳児はマリオや消防士、プリンセスなど思い思いの姿に仮装して登園しました。

パーティーでは5歳児24人が秋ならではの曲を楽器で演奏したり、ハロウィーンの曲に合わせて皆でダンスをしたりと、会を盛り上げてくれました。

最後は「トリック・オア・トリート」の合言葉で園長先生からお菓子をもらい、皆大喜び！

今年も子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができました。

（済生記者　齋藤里奈）

福岡総合病院
便秘のリスクや改善方法を
テレビで発信

KBC九州朝日放送「とっても健康らんど」（11月25日放送予定）の撮影が、当院で行なわれました。

「万病の元・便秘」をテーマに落合利彰副院長が、便秘が招く健康リスクや原因、治療について解説。熊本チエ子栄養科長が、もち麦やわかめ、納豆など食物繊維が多く含まれる食材や食べ方など、便秘を予防改善する食事について紹介しました。

若い女性に多く見られる便秘ですが、高齢になると男女とも に悩む人が増加。原因は運動不足や食事、水分不足とさまざま

で、重症化すると大腸がんや腸閉塞、脳卒中などのさまざまな病気を引き起こす可能性があります。

みなさんが健康に過ごせるようこれからもいろんな情報を発信していきたいと思います。

（経営企画課　山田愛梨）

岡山済生会総合病院
認知症をテーマに
市民健康セミナー

11月11日、第33回市民健康セミナーを当院さいゆうホールで開催しました。

当日は「認知症」をテーマに、心療科の北村直也診療部長、薬剤部の小武和正副主任、医療福祉課の小寺嘉代精神保健福祉士が講演。

認知症になるメカニズムや、神経認知症状と行動心理症状への本人や家族の対応、地域社会全体で認知症の人々を支えることの大切さ、抗認知症薬の種類や副作用、睡眠薬について、さらには認知症の経済的支援に関する社会福祉制度まで、わかりやすく説明しました。

参加者は47人。初参加の女性は「高齢の親のことなど身近な問題として興味があった。わかりやすい内容で勉強になった」と熱心にメモをとっていました。

（済生記者　髙畑貴子）

topicS

国民保護実動訓練にDMATなどが参加

〈埼玉〉加須病院

11月17日、埼玉県と加須市共催の国民保護実動訓練が市内の商業施設で行なわれました。

この訓練は、大規模テロなどに備えた関係機関の相互連携や対処能力の向上を図ることを目的に、2005年度から県が実施しているものです。

当院からはワークステーション型ドクターカーが出動し、災害派遣医療チーム（DMAT）が参加。警察、消防、陸上自衛隊、地元大学生など約500人での訓練となりました。

営業中の店内で毒性の強い化学剤・サリンが撒かれたという想定で訓練を開始。化学防護服を着た消防隊などが被害者の救助を、当院の医師や看護師、埼玉DMAT、日赤救護班が医療処置を行ないました。

人が多く集まる商業施設で、営業時間内での実施だったため、より実践的な訓練を行なうことができました。

（済生記者　蓬田絵里子）

緊急時に行動できる職員に

神奈川県病院

10月31日、保健師と看護師、事務職員ら計8人が参加し、「受診者が健診フロアで意識を消失していた」という状況を想定した訓練を行ないました。

当院予防医療センターは1日約40人が人間ドックや健康診断を受けています。採血や消化器検査などをきっかけに迷走神経反射や体調不良を訴える方がいるため、配慮や観察がとても大切です。

今回の訓練では、今年度ICLS（医療従事者のための蘇生トレーニングコース）を取得した看護師の指導の下、人形を使用しての胸骨圧迫と救急カートの準備、AEDの手配から使用までの一連の流れを体験しました。

健診フロアで急変時の訓練をするのは初めてでしたが、職員一人ひとりがどのような行動をすればよいかを学ぶことができました。

（予防医療センター
師長補佐代行　根岸由理子）

外出行事で秋を満喫

〈新潟〉特養長和園

当園が運営する通所型サービスA「オープンテラス花そーて」では、11月9日から5日間、外出行事を行ないました。8月のブドウ狩り以来3カ月ぶりです。

行先は弥彦菊まつりを開催中の弥彦神社です。色とりどりの菊と紅葉が楽しめますが、まつりが混雑している日は国上（くがみ）道の駅に行先を変更しました。

5日間で延べ50人の利用者さんが参加。片道30分ほどの道中、景色に感動し、おしゃべりが弾んで大変楽しそうでした。国上道の駅では買い物を楽しみ、足湯で疲れを癒やしました。

「外出を楽しみにしているみなさんの期待に応えて、今後も安全に配慮しながら外出行事を計画していきたい」と栗林佳子管理者。利用者さんからますます期待されそうです。

（済生記者　西川まゆみ）

地域イベント参加で認知度アップ

〈神奈川〉横浜金沢医療福祉センター

10月21日、広報活動の一環で「金沢まつりいきいきフェスタ」に参加しました。

横浜市金沢区の済生会7施設で構成され、この地域を医療・福祉で支えるという理念のもと活動している当センターですが、あまり周知されていないことが課題。済生会自体の認知度を高めることも含め、地域に向けて周知を図ることが必要です。

当日は済生会と当センターについての情報パネルを展示。簡単な三択問題に答えるようにし、済生会のがもらえるとおっしゃる人も。成り立ちや理念について伝えました。すると、パネルを見て通りすがりに「へぇ～済生会ね……」とおっしゃる人も。

山中竹春横浜市長も来場し、佐藤博信センター長と記念撮影を行ないました。

総勢26人の職員が参加しましたが、イベントも大盛況で多くの来場者が押し寄せました。

（若草病院・済生記者　長澤伸哉）

おそろいのジャンパーで仲間意識も向上

〈神奈川〉横浜市六浦地域ケアプラザ

10月21日、「第49回金沢まつりいきいきフェスタ」が海の公園で開催され、横浜金沢医療福祉センターとしてブースを出展しました。

センターの7施設（当施設もその一つ）が一緒に取り組む初のイベント。特養わかくさの清水雅施設長をWGリーダーに、若草病院の高木裕子さんがフットワーク軽く準備を進め当日を迎えることができました。

出展したブースではクイズや健康チェック、相談などを実施し、施設の広報活動を行ないました。当施設から参加した5人はおそろいのイエローのジャンパーを着て声かけや案内をし、ブースを盛り上げました。

フェスタ全体で12万人が来場。センターのブースには約800人が足を運んでいただき、大成功に終わりました。

（済生記者　山田和恵）

芝みつマドレーヌ300個完売

〈東京〉中央病院

11月3日、文化放送主催の「浜松町ハーベストフェスタ　浜祭2023」に出展し、「芝みつマドレーヌ」を販売しました。

芝みつマドレーヌは、当院が展開する「みんなとプロジェクト」の企画の一つで、港区芝で採れたはちみつを使い、福祉作業所のみなさんの力を借りて生産販売しています。

今回は、文化放送が4年ぶり

に開催した大規模イベントで、増上寺境内でラジオの公開生放送をやっていたこともあり、リスナーがたくさん集まりました。販売を担当したのは当院職員と「みんなとプロジェクト」メンバーの計4人。ラジオの声に負けないよう声を出して紹介した結果、用意した300個と焼き菓子を完売することができました。

（広報室長　佐藤弘恵）

載々

済生会の職員が寄稿した記事が、掲載された雑誌等を紹介します

病院広報をREBORNしてよい病院へ

京都済生会病院　松岡企画広報室長

「地域連携　入退院と在宅支援」第16巻第4号（日総研出版）の特集「変化に対応できるマーケティングの極意」に、松岡志穂企画広報室長が「LOVE YOUとLOVE MEをマインドに病院広報をREBORNして得たもの」を寄稿した。当院の抱えていた問題と病院広報の目的、対策、結果を解説している。

当院には地域での認知度の低さ、赤字経営などの問題があり、職員を第一優先の広報ターゲットと定めてアンケートを実施。情報共有ができていない、かつ自ら情報を得ることに消極的であるという結果を受けて、広報誌やWebサイトのリニューアル、まちづくりの取り組みなど、当院で行なった広報の見直しについて紹介している。

また、病院広報の目的に沿って取り組んだことが、評価向上や黒字化達成などにつながったと解説。当院の広報の目的は「京都済生会病院でよかった」を創造することで、そのための取り組みを継続することが今後の目標であると締めくくっている。

（済生記者　白須優也）

システム分析の活用等で連携医療機関の信頼を得る

〈大阪〉吹田病院　高元事務長　兼古地域連携課長

「最新医療経営PHASE3」2023年11月号（日本医療企画）の巻頭特集「患者、地域と向き合う第一歩　自院を活かすマーケティング術」に、高元信二郎事務長と兼古望地域連携課長のインタビューが掲載された。

地域完結型の医療を目指した病診・病病連携に取り組む当院では、医療圏内の医療需給の均衡を保持しつつ増患を図るための取り組みとして、システム分析の活用と専従の渉外担当による診療所への訪問営業を行なっている。

また、患者を集めるための活動には「医療機能連携病院」の認定があり、後方連携の充実を図る一方で、連携医療機関との関係性を作り上げる一翼を担っているが、「関係値は一朝一夕ではできず、すぐに結果を求めず継続することで良好な関係を築いていく」と兼古課長は述べている。

（済生記者　橋本　茜）

現場で知識不足を痛感し医療経営士1級を取得

広島病院　石見事務部次長

月刊「医療経営士」2023年12月号（日本医療企画）の連載記事「医療経営士と私」に、医療経営士1級取得の石見昌己事務部次長のインタビューが掲載された。

当院が抱える問題の解決のために経営層やコンサルタントと話す機会が増え、知識不足を痛感。取得を目指すきっかけになったと石見次長は話す。

取得後は会議での発言に自信が持てるようになり、その発言が周囲の職員の刺激となるのではと考えているそうだ。

また、経営状態のよくない施設の改善や、医療・介護・福祉の連携など、問題解決に向けて力を尽くしたいと目標を語っている。

（済生記者　足利麻里子）

ヘルニア手術の変遷と最前線エキスパートたちが座談会

〈大阪〉吹田病院　植野科長

当院のヘルニアセンター・植野望科長が「日本医師会雑誌第152巻・第8号」（日本医師会）の特集「Common disease 体表のヘルニアを学び直そう！」内での座談会「ヘルニア手術の変遷と最前線」に参加した。

座談会では、自治医科大学医学部消化器一般移植外科の佐田尚宏教授、他2人の医師とともに、ヘルニア手術への思い、鼠径部ヘルニア手術の変遷、ヘルニア手術の教育、術後の合併症・疼痛と再発、ロボット支援手術、ヘルニア診療の今後について意見を交わしている。

植野科長は「ヘルニア手術についての教育を系統的にし、ヘルニア学会として継続して啓発を行なっていく。ヘルニア治療のクオリティの均一化を図るには教育内容の充実以外にない」と述べている。

（済生記者　橋本　茜）

大雑報

身の回りで起きた、さまざまなことを楽しく報告するコーナーです。職場の話でも、家庭の話でも、休日の話でも。ご報告ください

「笑顔になろう」活動、大成功

〈島根〉高砂ケアセンターでは、3年前の夏から利用者さんの部屋の暑さ対策とコロナ禍での話題づくりを目的に、通所リハビリの利用者さんと一緒に、朝顔やキュウリでグリーンカーテンを作っています。今年は、種を前年の実や花から引き継ぎ、過去最高数の942本のキュウリが収穫できました。

収穫したキュウリは、在宅に戻る際のお土産として老健の入所者さんに、また通所リハビリに通う方などにプレゼント。お礼にキュウリ料理のレシピを教えてもらったり、感謝の言葉をたくさんいただいたりしました。

さまざまな制限でつらい思いをされたみなさんに、少しでも笑顔になっていただきたいと始めた活動です。「笑顔になろう」パート1、完！

（島根・高砂ケアセンター　作業療法士　上田順哉）

★900本越えのキュウリの収穫！河童が見たら大興奮ですね。キュウリのレシピ気になります。

（本部広報室　杉山菜央）

初参加でサブ4達成

11月5日に開催された「下関海響マラソン2023」に初参加しました。当日は夏のような強い日差しが降り注ぐ中、およそ7900人のランナーと一緒に関門海峡の街を駆け抜けました。

噂に聞いていたコース後半のアップダウンの激しさに体力を奪われ、何度も止まったり歩いたりと心が折れる寸前でしたが、沿道から市民やボランティアからの声援が途切れなく聞こえ、「歩かない、走れ！」と独り言を言いながらなんとギリギリの3時間59分56秒で無事にゴールできました！　一応、「サブ4ランナー」です（笑）。

これからもランナーとしての挑戦を続けていきます。

（山口地域ケアセンター　済生記者　楊　玉華）

★初出場でサブ4！　すばらしい快挙ですね。それにしてもすてきなコース。潮風が気持ちよさそうです。

（大空出版　後藤藍子）

干し柿作りでいきいき

「なでしこのみなさんに助けてもらえないですか？」とご近所さんから焼き菓子を完売することができました。

（広報室長　佐藤弘恵）

ら山のような渋柿をいただきました。干し柿作りなら皆に協力してもらえるかも……という職員の勘は的中。渋柿の山を見ると利用者のみなさんから「渋柿やわぁ！　懐かしいわぁ」と歓声があがりました。

皮むきをしながら「昔、お母ちゃんやおばあちゃんと一緒に作ったわぁ」「そうやった、そうやった」「小さくて包丁を触らせてもらえなかったなぁ」など、昔話に花が咲きました。職員も作り方を教えてもらい、皆の交流に柿が一役買ってくれました。

布団から出るのがつらい寒い朝、利用者さんが柿の仕上がりを楽しみに「やっぱりなでしこ草津に行こう」と思ってくだされば、干し柿の美味しさもぐっと上がるかもしれません。

（滋賀・看護小規模多機能型居宅介護事業所なでしこ草津　看護課長　村田真由美）

★祖母宅の縁側の風景が懐かしいです。ギュッと甘さと思い出の詰まった干し柿、楽しみですね。

（メディカル・リーフ　富谷咲希）

引き続き絵画にハマってます！

飯塚市美術展と嘉麻市総合文化祭に絵を出展しました。

飯塚市美術展は10月25～29日の5日間、飯塚市のコスモスコモン展示ホールで開催。展示された応募作品の中からいくつか表彰されるのですが、私の作品は〝入選〟！　……というと表彰されたように見えますが、表彰されなかった人たちはすべて入選でした（入選というより落選？）。

嘉麻市文化祭に出展した「五十鈴川」

応募作品はどれもレベルが高く、写真と見間違うようなものも。チャレンジ精神がかき立てられます。

嘉麻市文化祭では11月10～12日の3日間、嘉麻市の山田生涯学習館に絵が飾られました。所属するアートサークルでの展示となったのですが、公民館の備品のアルミフレームが使われており、見栄えがイマイチな感じ……。額縁の大切さを感じました。ただ、額縁ってけっこう高いんですよね……。

（福岡・飯塚嘉穂病院　済生記者　春口勇介）

★作品に描かれた川の水面のきらめき、澄みわたる雰囲気に心ひかれました。次作の寄稿にも期待！

（メディカル・リーフ　坂本陽子）

地域の伝統を次世代に

10月20日、〈愛媛〉小田診療所のある愛媛県内子町小田地区の秋祭りが4年ぶりに開催されました。前日は宵祭りとして獅子舞の一行が診療所を訪れ、軽快な太鼓のリズムとともに勇壮な獅子舞を披露してくれました。当職員の黒田良文さんは地元の獅子舞保存会の一員として学生への指導を行なうほか、この日の獅子舞では重要なサル役を担当。普段は見せない陽気な雰囲気で大いに祭りを盛り上げていました。

小田地区では伝統行事を次世代へ継承するために、地元の幼稚園児と高校生が授業の一環で獅子舞を学んでいます。18日に行なわれた子どもたちの獅子舞披露にはNHKの取材も入り、活動を知っていただくいい機会となりました。

（愛媛・小田診療所　済生記者　福岡博実）

★他にも黒田さんのCoolな姿の写真があるのに紙面の都合で掲載できません。いつの日か披露します。

（本部広報室　河内淳史）

私を元気にしてくれる〝魔法の手〟

9月まで〈岡山〉吉備病院の通所リハビリを利用していた小幡幹子さん。現在は訪問サービスでリハビリを頑張っています。

通所時の送迎は私たち業務課が担当。薬の副作用で会話もできないくらい体調が悪い日もありましたが、小幡さんにとってリハビリに通うことが元気の源のようでした。帰りの車ではいつもすっきりした表情で「リハビリの先生が魔法の手で私を元気にしてくれるんよ」。

担当の作業療法士にどんなリハビリをしているのかと聞いたら「特別なことは何もしていません。ただおしゃべりをしながらリハビリをしているだけ」とのこと。小幡さんにとって魔法の手は、作業療法士の中尾文恵さん、長野早紀さんの「まごころ」だったのです。なんだかとてもうれしい気持ちになりました。

（岡山・吉備病院　済生記者　難波美紀）

★「まごころ」は医療・福祉の提供で大切な部分ですね。それをサラッとできる中尾さんと長野さんがすばらしいです。

（本部広報室　杉山菜央）

黒枝豆の収穫祭で心も元気に

収穫の秋。病院の裏庭で栽培していた黒枝豆が、今にもはじけそうな勢いで成長していました。10月23・26日に開催した収穫祭には、難波洋一郎院長をはじめ、リハビリの一環として2日間で入院患者さん18人が参加しました。

患者さんの中には「久しぶりにお日様の光を浴びた」とうれしそうな人も。リハビリ職員から両手にビニール手袋をはめてもらうと、膝の上に置かれた黒枝豆の茎を脇に挟み、動く方の手で上手にサヤを取っていました。職員の「大丈夫ですか」との問いかけも気にならない様子で一生懸命作業する姿に、私も元気をいただきました。

日常生活へ戻るために毎日リハビリを頑張っている患者さんと季節を共有し、収穫の喜びを分かち合えて充実した一日となりました。

（岡山・吉備病院　済生記者　難波美紀）

★土や野菜に触れ日を浴びることは元気の源ですよね。そして黒枝豆、お味がとっても気になります……。

（メディカル・リーフ　富谷咲希）

カレンダー事件（最後は仲直り）

昨年12月、本誌の「済生に載った写真をカレンダーにしてプレゼント」企画に当院が当選し、オリジナルカレンダーを上・下期5部ずつ作ってもらいました。

思ってもみない贈り物に皆大喜び！　カレンダーに載っている人たちに配ることになりました。職員の親戚の子どもたちも写っていたので、1部はその姉弟へプレゼントしました。

それから10カ月……。その職員からカレンダーが余っていないか問い合わせが。聞いてみると、すごく気に入って大事にしていたそうですが、ある日弟くんがハサミを使いたい衝動に駆られ、なんとカレンダー

次号予告

済　生　No.1135［令和6年1月号］

済生会の不易流行論（184）　炭谷　茂
NEWSな済生人
済生会交差点
この人　哀川　翔
口福にっぽん（76）　黄金ほうとう（山梨市）
てづくりおもちゃ　いまいみさ

広告索引

三井住友銀行
――表紙見返し［表紙2］

が餌食に……。お姉ちゃんに怒られ、2人とも大泣きしてしまい、困ったお母さんから申し訳なさそうに連絡があったとのこと。

喜んで私の部署のものを譲ったら、後日、仲直りした2人のかわいい写真を見せてもらいました。

（佐賀・唐津病院　済生記者　相島蘭香）

★2人とも1年で大きくなったね。相島さん、うれしい記事送ってくれるじゃないですか。泣けてきます……。

（本部広報室　河内淳史）

食べてほしい、銚子の伊達巻

当院がある茨城県神栖市から利根川を隔てた対岸の千葉県銚子市名物「伊達巻」をご存じでしょうか。たっぷり出汁を含み、ずっしりと重い伊達巻は長さ30センチほど。一般的な伊達巻とは異なる扇型の滑らかな断面に、出汁のきいた甘めの味付け、プリンのようなめらかな舌触りにはいい意味で驚かされます。

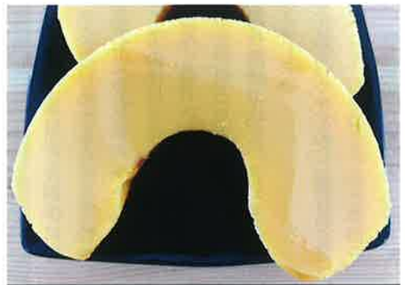
10月28日に当院で開催したオータムフェスタで市内の寿司店「たまいち」さんがこの伊達巻を販売するというので、ブースには朝から行列ができるほどでした。

機会があればぜひ召し上がっていただきたい一品です。

（茨城・神栖済生会病院　済生記者　江口裕紀）

★プリンのような伊達巻、気になります！　今度のお正月のために入手しようかしら……。

（メディカル・リーフ　坂本陽子）



切ると直径 12～13センチ。
つやつやと輝く断面はプリンそのもの

済生会

明治44年2月11日、明治天皇は、時の総理大臣桂太郎を召されて「恵まれない人々のために施薬救療による済生の道を広めるように」との済生勅語に添えてお手元金150万円を下賜された。桂総理はこの御下賜金を基金として全国の官民から寄付金を募って同年5月30日恩賜財団済生会を創立した。

以来今日まで112年、社会経済情勢の変化に伴い、存廃の窮地を乗り越えるなど幾多の変遷を経ながらも、本会は「施薬救療」という創立の精神を引き継いで保健・医療・福祉の充実・発展に必要な諸事業に取り組んできた。

戦後、昭和26年に公的医療機関の指定、同27年に社会福祉法人の認可を受け、現在、社会福祉法人恩賜財団済生会となっている。

総裁　秋篠宮皇嗣殿下
会長　潮谷義子
理事長　炭谷　茂
本部＝東京　支部＝40都道府県
病院　81
診療所　20
介護医療院　2
介護老人保健施設　28
救護施設　1
児童福祉施設　25
老人福祉施設　120
障害者福祉施設　9
看護師養成施設　7
訪問看護ステーション　64
地域包括支援センター　31
地域生活定着支援センター　5
その他　10
合計　403（数字は令和4年度）

さらに巡回診療船「済生丸」が瀬戸内海の60島の診療活動に携わっている。

職員数は全国で約6万4000人。

済　生［令和5年12月号］
THE NEWSLETTER of
Social Welfare Organization
Saiseikai Imperial Gift Foundation, Inc.

令和5年12月10日発行
通巻第1134号（第99巻第12号）
編集兼発行人　炭谷　茂
発行所　社会福祉法人恩賜財団済生会
〒108-0073
東京都港区三田1-4-28
三田国際ビルヂング21階
TEL：03-3454-3311（代）
FAX：03-3454-5576
印刷所　株式会社白橋
東京都中央区八丁堀4-4-1

©社会福祉法人恩賜財団済生会

社会福祉法人 恩賜財団 SAISEIKAI MISUMI HOSPITAL 済生会みすみ病院

住み慣れた地域で生活するために、
住民の「あし」と「元気」を守りたい！

第一目標金額
800万円

移動手段の少ないこの地域を支えるため、
リハビリテーション室へ新たな機器を導入

運転シミュレーター、電動車いす、
電動シニアカー導入にご寄付を

熊本県宇城市三角町の高齢化率は45％を超えています。地域の公共交通は少なく、車を持たない高齢者は生活に必要な「あし」がなく困っています。地域では電動車いすや電動シニアカーのレンタルも行っていますが、「運転が慣れずに怖くて乗れない」という方が多い現状です。また、怪我の手術や脳卒中後のリハビリ中の方で運転ができるか不安な方、高齢になり運転操作に対して不安がある方などの運転再開支援・運転操作評価も必要です。そのような方が安心して移動ができる街を目指す一つの解決策として、運転シミュレーターによる適切な評価と自動車運転が不可能だと判断された場合、それに代わる電動車いすや電動シニアカー普及のため新たな機器を導入することにいたしました。温かいご支援をよろしくお願いいたします。

クラウドファンディングに挑戦

寄付募集期間
2023年11月6日（月）～2024年1月31日（水）

いただくご寄付の使い道
運転シミュレーター、電動車いす、
電動シニアカーの導入費用

クラウドファンディングとは
インターネットを通して活動や夢を発信することで、想いに共感した人や活動を応援したいと思ってくれる人から資金を募る仕組み。All inというルールで、目標金額の達成の有無にかかわらず実行者は寄付金を受け取ります。

ご寄付・詳細は
WEBサイトまたは会計窓口へ

みすみ病院　レディーフォー

THE NEWSLETTER of Social Welfare Organization | 第134号 | 令和5年(2023年)10月10日発行(毎月1回・10日発行) | 社会福祉法人 恩賜財団 済生会

D-MATカーの更新・

群馬県の医療を支え続ける

救急処置室の改修を

社会福祉法人 恩賜財団 済生会
群馬県済生会前橋病院

クラウドファンディングに挑戦

群馬県済生会前橋病院は県央前橋地域の基幹病院として急性期医療を担い、前橋医療圏の病院群輪番病院として二次救急を担っています。また、群馬県地域災害拠点病院に指定され、災害派遣医療チーム(D-MAT)も2チーム有しています。D-MATはこれまで新潟県中越沖地震や東日本大震災、熊本地震、草津白根山噴火等の際に活動を行ってまいりました。20年近く経過した救急搬送車(D-MATカー)を更新し、群馬県内外の災害及び大地震等が発生した際に、広域医療搬送など多岐にわたる医療的支援を行えるようにするとともに、将来起こりうる災害や事故に備え、365日24時間体制で出動できるようにしていきたいと考えております。

また、救急搬送患者の受入は年々増加し、2022年は2,395件となりました。老朽化した救急処置室の改修・拡充工事を行って、より快適な受診や充実した受け入れ体制が実現できるようにしたいと考えております。このプロジェクトを通して、「①救急搬送車(D-MATカー)の更新」、「②救急処置室の改修・拡充」を実現し、さらに地域の皆様の期待に応える高度専門・急性期病院を目指してまいります。ご寄付、応援のほどよろしくお願いいたします。

群馬県済生会前橋病院 院長
細内 康男

寄付募集期間 2023年11月1日(水)9:00 → 12月26日(火)23:00

第一目標金額 1,500万円

いただくご寄付の使い道
①救急車(D-MATカー)の更新
②救急処置室の診察室・点滴処置室の改修工事

病院窓口においてもご寄付を受け付けております

READYFOR

クラウドファンディングとは
インターネットを通して活動や夢を発信することで、想いに共感した人や活動を応援したいと思ってくれる人から資金を募る仕組み。
All or Nothingというルールで、万が一目標金額に届かなかった場合、集まったご寄付は寄付者に返金となります。

ご寄付・詳細はWEBサイトをご覧ください
https://readyfor.jp/projects/maebashi2023

群馬県済生会前橋病院 クラウドファンディング

ISSN 1343-571X

P-B10139
グリーン・プリンティング
この印刷製品は、環境に配慮した資材と工場で製造されています。